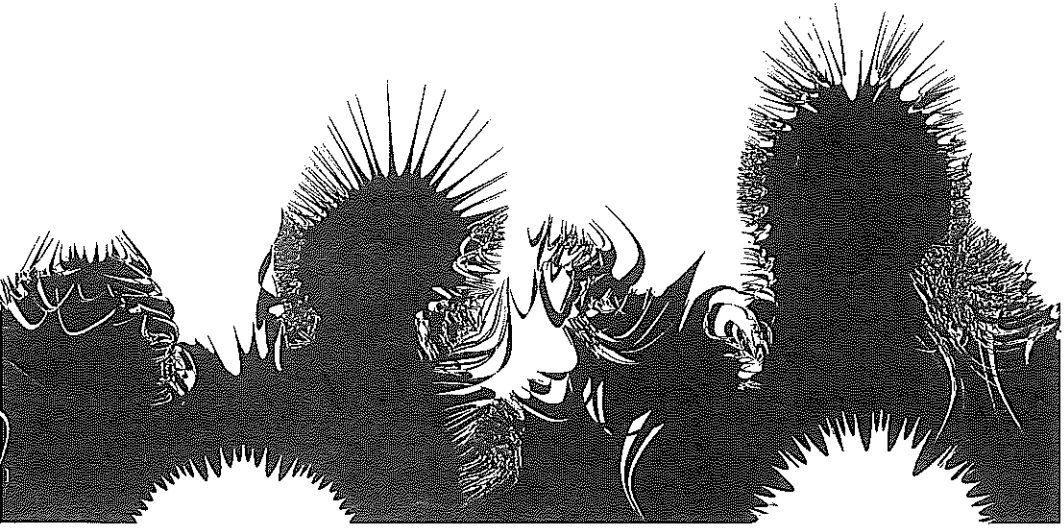
神の都を目指して生きる

～歴史から学ぶキリスト者の生き方～



もくじ

ページ

まえがき　1

神の都を目指して生きる

～それは歴史に生きることから始まる　山崎龍一

第１章　はじめに　2

第２章　アンケートから　10

第３章　この国で教会を建てあげるために　15

第４章　天の都を目指して　22

第５章　考えてみよう　27

歴史に関する学生の意識調査 アンケート結果報告　33

証し　松尾献　51

まえがき

2006年春、松尾献兄（当時学生）の生き様がKGKで分かち合われたことを発端に、KGK事務所で「日の丸・君が代集会」が持たれた。さらにこのことをきっかけに、数名の学生有志が集い、日本キリスト教会史の学びを始める。学んできたものを他の学生にも共有したい、そのような思いの中、このブックレットが発行されるにいたった。

このブックレットは「対話」を必要としている。新たな視点に気が付いた方もいるだろう。また納得できない思いを抱えた方もいるかと思う。だからこそ、これを機に対話をKGKの中で重ねてほしい。皆さんの対話の中で生まれていった「より届く、より練られた信仰の言葉」を模索してほしい。そして今回の至らないところを再編集してほしいと願う。

このブックレットを通して、教会史的視座から真に聖書的世界観にたつ学生が育っていくことに期待をしている。

2009年3月
関東地区主事　高木創

神の都を目指して生きる

～それは歴史に生きることから始まる～

KGK 主事　山崎龍一

第１章　はじめに

「今」を形成するもの

教会の伝道集会やKGKの夏期・春期学校などの集会で「証し」を聴くことがあります。その人がどのような人生を送り、また試練に直面し、そして信仰をもつに至ったかを語るところから「証し」が始まることが多くあります。クリスチャンホームで育った場合でも、自覚的な信仰を持つまでの間、その生い立ちの中で信仰に疑いをもったり、親に反発したり、親からのよい影響について思いを馳せながら、過去の様々な経験が「今」に深く影響していることが語られます。その人の歩んできた道（つまり人生の歴史）を語ることなしに、その人にとっての人生の意味を語ることはできないからです。

その人の歩んできた道・経験は人格に深く影響します。悲しい経験や嬉しい経験にどのような意味を見出すか…その「意味付け」が人生の土台となるからです。私たちは過去の経験を変えることはできません。しかし過去の出来事が私たちの人生にどのような意味があったかをキリスト者として見つめるとき、変えることのできない様々な過去を土台としながら、過去の経験に対する私たちの人生の態度を変えることができるという希望をもっています。過去の経験や歴史は個人のみではなく、団体や組織、教会、そして国家という巨大な組織に至るまで大きな影響をもちます。過去から

の経験と「意味」の集大成が文化を形成していきます。

長い歴史の中で培われた文化と、その時代性（現代性）の中に私たちは生きています。キリスト者である私たちはその「文化」に無批判に適応したり従うのではなく、聖書を土台として、文化とそれを形成している過去への理解に対して、しっかりした考え（キリスト教的な世界観）をもつことが求められます。キリスト者として生きることは、天国への切符を手にして心の平安をもって生きることではなく、私たちが生かされている社会生活もまた、やがて主イエスが来られる神の都への歩みの途上であり、地上での生活に責任をもって生きることが福音に生きることを意味することをこのブックレットを通して、皆さんと共に考えてみたいと思います。

私は学生時代、ちょうど 1985 年を迎えました。「戦後 40 年」という文字がマスコミでも大きく取り上げられ日本の戦争加害の実態が語られるようになりましたが、同時に中曽根首相（当時）が戦後政治の総決算というスローガンのもと日本の首相として靖国神社を公式参拝し、アジア各国から大変な非難を浴びました。またアジアへの「侵略」と書かれた教科書を「進出」と置き換えるようにと文部科学省が指導したことから、「教科書問題」も勃発しました。

まさにその 1985 年、同じ侵略国家、加害国であったドイツの大統領が歴史認識においてすばらしい演説をしました。この演説は後に「荒野の 40 年」と呼ばれるようになり、「ありきたりの式典演説をしたのではなくて、人の心を打つ言葉で、ドイツ国民の罪責を告白し、悔い改めを語り、過去をしっかり見つめる以外にドイツ国民の現在も将来もないことを明言した」（「ヴァイツゼッカー」p12：加藤常昭著：清水書院）のです。

私が大学生として経験した 1985 年は、その後第二次世界大戦をどのように評価し、過去の歴史に目を向け、この地上の生活において責任をもって生きていくかということの大きな分岐点になりました。それは、その後 20 年の歴史を経て日本がいかに国家主義に陥って行っているかという歴史を見れば明らかでしょう。山口県殉職自衛官合祀事件（1988 年）において、クリスチャンである女性が夫の殉職後、護国神社に祭られたことを取り下げて欲しいという願いに対して、最高裁は未亡人の女性にもっと寛容でありなさいという人権意識の低い判決を出しました。自分の亡き夫への追悼の方法まで、自衛官であったという理由で司法から「非寛容」だと非難される時代に逆戻りしたのです。さらに昭和天皇の死去（1989 年）には、明らかな憲法違反による大嘗祭が国家神道を「伝統と文化」という言葉で宗教性がないと主張して強行し、1990 年代に入り元従軍慰安婦の方々が来日し、日本政府を相手に賠償訴訟を起こしましたが、彼女たちの訴えは認められませんでした。そのような社会の動きの中、1993 年台湾での EARC での KGK 学生の謝罪がなされることになるのです。（全国協

議委員会「わたしたちとアジア」参照）あの謝罪によって韓国の兄弟姉妹が反発した時代背景もまた、私たちが知るべきことの一つでしょう。

時代を観る眼

KGKは時代の流れをしっかりと見つめ、そしてキリスト者がこの地上で生きる意味を福音によって見いだすことの大切さを語り続けてきました。KGKの機関誌、週刊『キリスト者』（1994年に廃刊）の1967年12月10日第191号の一面記事は「靖国神社国家護持問題」として、キリスト者の時代を観る眼の大切さが記されています。この時代は政府が靖国神社を国営化するため「靖国神社を非宗教化して国営化する」ということを目指した法案が大きな議論を呼んだ時代でした。この『キリスト者』の記事では靖国問題を二つの視点から取り上げています。それは神社の宗教性と国民の戦争責任です。つまり、信教の自由及び戦争責任という立場で問題を取り上げていますが、教会の罪責（教会が戦時中に神社参拝などに屈し、戦争に賛成してきたことなど）という側面では一度も取り上げられていません。一生懸命に時代を観る眼を養おうと取り組んできたKGKでしたが、その時代を神様から宣教を委ねられた教会の歴史と重ね合わせるように見つめる成熟さを持ち合わせてはいませんでした。時代を観る眼は、主権者である神様とその業を委ねられた教会の視点で見つめなくては、不十分であることを学習するにはまだ機が熟していなかったのでしょう。

1985年、あの戦後40年の年でさえ、KGKは全国集会において、国立青年の家を利用するにあたって、朝の集いで「君が代」を歌っていました。当時、私自身なぜ「君が代」を歌ってはならないかということを、まったく理解していませんでした。たった一人の学生が「キリスト者として君が代を歌うことなどできるはずがない」と主張し、朝の集いを欠席していたことを知っていました。私は漠然とキリスト者が「君が代」を歌うことは許されない雰囲気があることを感じ取っていただけでした。自分の経験から、親と生き別れとか、悲しい子供時代を過ごした人たちに対する私の同情心は非常に大きく心が揺り動かされることはありましたが、君が代に象徴される信仰や福音理解の問題について、また君が代と日の丸のもとに命を落し、肉親が殺され、蹂躙された人々の悲しみに思いを馳せることはできませんでした。さらに日本の教会の罪責などまったく知りませんでした。ヒューマニズムに基づく同情心を隣人愛と誤解し、信仰の告白の問題と、自分の周りにある悲しみの諸問題を結びつけることができていなかったのです。私自身の「時代を観る眼」の未熟さがありましたし、KGKもまた時代を観る眼が成熟するまでに、さらに時間が必要でした。

93EARC 以降の KGK

KGK では 93 年 EARC の謝罪以降、各地区で学生たちの自主的な学びが始まりました。EARC での謝罪に対する韓国の兄弟姉妹の反応から、KGK は謝罪の意味について考え始めたのです。これは IFES の交わりを通して彼らが真剣に私たちの謝罪に対し率直な反応をしてくれたからこそ、私たちは考えることができるようになったのです。私たちの学びは常に対話をベースにしながら、人々の心と向き合いながら取り組まなくてはならないことを韓国の兄弟姉妹から教えてもらいました。

93EARC から 2 年後の 1995 年、戦後 50 年を迎え、日本社会でも第二次世界大戦で犯した罪について見つめることが起こり始めました。それは勇気をもって訴訟を始めた元従軍慰安婦の方々や戦時中に日本の政府や日系企業に強制連行された人々が未払い賃金の請求などの訴訟を多く展開した結果、やっと日本人の心にも日本がアジアで何をしたかを見つめることができるようになったのです。それは訴訟を起こした方々がご高齢で、これ以上「待てない」年齢に達し、人生最後の力を振り絞って来日し訴訟を起こしたことの積み重ねの結果でもありました。元従軍慰安婦の方々が訴訟のために来日し宿泊した場所に、私は偶然に居合わせたことがありました。彼女たちの来日を支えたのは日本基督教団の牧師達であり、祈りをもって裁判所に向かっていった光景を見ました。元従軍慰安婦の方々が 50 年前に何があったかを裁判所で証言している途中で、その記憶のおぞましさに気を失ってしまう方もおられたと聞いています。50 年以上にわたって、一人の人生を悲しみに突き落とし、人間の尊厳を奪ってしまったことを真剣に受け止め、その方々の悲しみが今も続いていることをはっきりと知るべきでしょう。その声に耳を傾けること、そして隣人となることが私たちの人生の責任でもあります。

95 年の戦後 50 年の節目になり、福音派の諸教会でもやっと「教会の罪責」を認めるようになってきました。日本の教会もまた戦争中は被害者であると思い続け、戦時中に犯した教会の罪（第三章をご覧ください）を認めることができませんでした。これは世の中がようやく戦争責任を認め始めた頃に、やっと教会でも「戦争責任告白」をし始めたのではないかと思ってしまうほどに「遅い」告白でした。しかし諸教会が「遅い」と言えるほど KGK が先進的にこの問題に取り組んでいたとも言えません。KGK もその初期から「週刊キリスト者」で、靖国法案などについて意見を論じながらも、戦争中の教会の罪の歴史については沈黙を守っていました。いえ、主事会でさえまだ教会の罪責を認識するに至っていなかったのではないかと思います。

97 年全国集会

そのような歴史の中で 1997 年、再び全国集会の会場に国立青年の家を選び準備を進めました。準備の途中で話し合いを重ね、朝の集いで「君が代」を歌うことと、「日の丸」を掲揚する儀式に出席しなければ会場予約を取り消す可能性があるとの青年の家側の主張を真っ正面から受け止め、立ち向かったのでした。立ち向かうとは単なる反抗ではありません。まさに自分たちが告白している信仰に立ち続けること、つまり他の土台の上には立たないことを意味します。大嘗祭という神道儀式によって天照大神になる儀式を経た天皇（現行憲法では天皇に即位するのに大嘗祭は必要ない）が治める世の中がいつまでも続きますようにという「君が代」を、私たちはキリスト者として歌うことはできないのです。

「青年の家」との議論は内容としては先方の担当官の人事にも影響するシビアなものでした。同時にこの交渉中に「青年の家（文部科学省）と争うのはキリスト者として証にならない」という声を多く聞きました。ただ、偶像礼拝を拒否し、正しい歴史観をもって生きようとすることを「証しにならない」とする発想の根源的な意味を私たちは問い続けなくてはなりません。

KGK は「君が代」を拒否すれば会場を使えない可能性があり、NC の開催を揺るがすことになりますので、NC 準備委員会や全国協議委員会、そして主事会でも重々しい議論が続きました。準備委員と主事たちの議論の中には、アジアへの加害の歴史や信教の自由という憲法論議が熱心に語られましたが、この問題を「日本の教会の罪責」として言及することがありませんでした。

戦後 50 年における世の中の謝罪ブームに乗った形で、さらに 93EARC 謝罪の記憶の残っていたことから、青年の家との交渉を一生懸命に取り組みましたが、キリスト者として正しく時代を観る眼は成長していませんでした。97NC の青年の家とのやりとりでは、KGK がマスコミに情報を流すことを嫌った青年の家側が軟化妥協し、「君が代」なしの会場使用となりましたが、信仰告白が問われる問題であるという理解にまでは至りませんでした。このように十戒の第一戒を犯さないためという理解のみで、教会の歴史から思考できなかった「君が代論争」は、もともとこれらの問題に関心を寄せない人々を、さらに遠ざけてしまう結果となってしまうことがあり、97 年の時点では KGK もまた、同じ失敗をしてしまったのではないかと思っています。

右傾化する日本

その後、時代は大きく右傾化の波にのみこまれていきました。1999 年

には国旗国歌法案が可決され、「君が代・日の丸」は法律で定められたものとなりました。2001年には「新しい歴史教科書を作る会」も結成され、過去の日本の犯した罪の問題を見つめる歴史観を「自虐史観」と呼び、従軍慰安婦や南京虐殺はなかったという主張を元にした歴史教科書を作成する会が始まりました。2000年代は、いわゆる有事関連法案が可決され、日本は戦争ができる国となりました。さらに「有事の際」には信教の自由は心の中に制限されるという政府答弁があっても、教会は驚きも抗議もしなくなっていったのです。戦後50年にあれほど謝罪文を出した諸教会もまた、地の塩として歩み続ける福音理解を深めることから後退してしまったようにも感じます。

学習指導要領が改訂され「愛国心」が謳われ、東京都では式典で君が代を歌わない教員の解雇にまでつながる露骨な人事政策にでるようになりました。また小泉首相の靖国参拝はアジアからの反発を招きながらも、強行されていきました。このような時代に私たちキリスト者は何を見据えて生きていくべきなのでしょうか。時代と国家の中でのキリスト者の使命を、教会の歩みの中で考え、祈ること、あらゆる時代を貫く福音の問題として理解することが、IFESの交わりの中で信仰が培われてきたKGK学生の使命と言えるのではないでしょうか。

演説「荒野の40年」

日本がアジアを侵略していた同時期、ドイツもまた先の戦争では近隣国を侵略し、歴史に悪名を残すユダヤ人大虐殺という罪を犯したのでした。そのドイツで戦後40年、キリスト者であるヴァイツゼッカー大統領によって以下のような演説が行われました。

『今日われわれの国に住む圧倒的に大多数の者は、あの当時、まだ子供であったか、あるいはまだ生まれてもいなかったのであります。そのような者は、自分が犯してもいない犯罪についての自分の罪責を認めることはできません。豊かな感性をもつ人々にとっては、これらの人々に、ただドイツ人であるという理由で、悔い改めのしるしの粗衣を身に着けることを期待することは不可能です。しかし、父たちは、この人々にまことに困難な遺産を残してしまったのであります。

罪責があろうがなかろうが、年をとっていようが若かろうが、われわれはすべてこの過去を引き受けなければなりません。この過去のもたらした結果が、われわれすべての者を打ち、われわれは、この過去にかかわらない訳にはいかなくなっているのであります。

老人も若者も互いに助け合あって、この過去の記憶を生き生きと保つことが、自分たちの生命に関わるほど大切なのは、なぜであるか、よく理解

しうるようにしなければならないし、それは、可能なのであります。
この過去を清算することが大切なのではありません。それは、われわれには全く不可能であります。過去を、後から変更したり、なかったことにすることはできないのです。しかし、過去に対して目を閉じる者は、現在を見る目を持たないのであります。かつての非人間的な事柄を思い起こしたくないとする者は、新しく起こる非人間的なるものの伝染力に負けてしまうものなのであります。
ユダヤの人びとは忘れることはないし、何度でも思い起こすことでありましょう。われわれは、人間として、和解を試みないわけにはいかないのであります。まさにそれ故に、われわれは理解しなければなりません。思い起こすことなくして和解は起こり得ないことを。(中略)もしわれわれが、かつて起こったことを思い起こすことなく、かえってみずからこれを忘れようとするならば、それは、ただ単に非人間的なことにとどまりません。そうではなくて、生き残っているユダヤ人の人々の信仰を傷つけることにさえなるのです。そのようにして和解の手がかりを壊してしまうことになるのです。』
「過去に対して目を閉じる者は、現在を見る目をもたない」という部分を中心にした言葉が多くの人々の心を捉え、歴史を学ぶことの意義について再確認させられたのでした。戦後40年、世代交代がなされ「戦争を知らない世代」が圧倒的に多い時代となっていました。今の学生の皆さんが「自分には戦争に関しての責任はない」と感じるように、20年前にもそのようなことを考える青年たち（まさに私の世代）が多くいたのです。その意味でも、戦争という歴史に対してどのような態度で臨むことが人間の責任であるのかを明らかにした演説として多くの人の感動を呼びました。

終末への歴史観

この演説は「歴史」をどのように理解するかという「歴史観」を学ぶ入り口になります。日本に生きる私たちは、神様から遣わされたこの国の歴史、そして日本のキリスト教会の歴史を学ぶことを通して、現在の使命を正しく理解することができるようになります。教会こそ、この地上において神のみこころを明らかにし、使命をもって歩む責任が委ねられているところだからです。聖書全体から歴史をみるとき、過去のこととして理解するのではなく、歴史を支配している神様の御心を深く受け止め、その歴史が「終末」に向かって歩んでいることを知らなければ、この世界を正しく理解することはできません。
日本では戦時中、熱心に信仰をもちながらも聖書全体から歴史観を養うことができませんでした。戦時中に「信仰を貫いて検挙された」と説明さ

れていた牧師たちは、具体的には治安維持法で検挙されました。彼らは「再臨信仰」を強調するグループに属しており、やがて主イエスが再臨し王として世界を治めるという思想が、万系一世の天皇統治の思想とぶつかることが国家から問われたのです。聖書が語る信仰を貫き、キリスト教的な歴史観に立とうとしたとき、それは非常に政治に深く関わる問題となる時代でした。真剣に聖書を読んでいても、聖書が示す歴史観つまり創世記に始まり黙示録によってこの地上に終わりが来て、やがて神様の支配する都が確立するという「歴史観」をもつならば、かつての日本のように、国家がその神様から委託された権威を超えていくときには、私たちの信仰が国家という大きな組織と対立することさえありうるのです。それは信仰を政治問題化するのではなく、国家の罪が私たちの真剣な信仰によって明らかになり、国家に対して警鐘をならす使命があることを私たちに教えてくれるのです。

しかし、当時の日本の牧師たちは再臨信仰を強くもちながらも「君が代」をうたい、神社参拝をしていたのですから、明確な歴史観に立っていたというよりも、聖書を熱心に読みながらも日本社会からは浮かないようにと配慮する二元論的な信仰であったようです。

キリスト者として歴史を学ぶということは、過去の出来事から「教訓」を汲み取るということではなく、この世界における神様の主権と摂理を学び、現在に生かされている私たちにどのような使命が与えられているかということを考えることにはじまります。歴史は過去だけにとどまることなく、やがて主イエスが来られる世界にまで続くことであり、その使命のひとつは、この地上において福音による和解をもたらすことだと「荒野の40年」で大統領が自らの信仰の告白として語ったのです。現代日本に遣わされた者として、誰と和解するかを理解するために、日本の教会が置かれた歴史を理解することは必須条件です。

終末について聖書からわかりやすく書いてある本として『小羊の王国』（岡山英雄著、いのちのことば社）をお勧めします。神様の創造された歴史の先にある終末を聖書から学び、歴史の主権者は神様であって、この時代にあって何に立ち向かうべきかを聖書からしっかりと学ぶことです。みことばにしっかりと立つことが、この時代にあって時代を見極めることにつながるということを知ることができます。歴史の学びや国家に対する学びは、信仰や救いと無関係だと思いやすい私たちの弱さを、終末という視点を聖書から教えられながら読み、その上で日本の歴史を克服し、現在の国家や政治の中での使命に生きるようにしたいと思います。

生涯運動としてのKGKへ

大学を卒業し、この信仰の旗印のもとに日本社会で生涯生きるために、聖書を土台とした価値観をもって社会に立ち向かう信仰を養うことが学生時代に決定的に大切です。社会で成功するとか、自分が幸せになるためだけに生きるのではなく、やがて来る神の都に至るまでの人生を貫く生き方を知ることが真の幸福であり、地上での生活を永遠につなげるものになるのです。そのとき、歴史に生きることが成熟した神の民として生きることになるのです。

学生時代に信じた福音、幼い頃から信じていた福音を、学生時代にその奥義をより深く学び、さらに具体的なアジアの兄弟姉妹との対話の中で知るとき、私たちの福音は理解から和解へと成熟していくのです。その成熟した福音こそ、生涯を深く支える福音です。単に歴史の学びだけではなく2006年に大学を卒業したKGKの先輩の人生の上に起こったことをきっかけに（松尾献兄の証参照）、有志で「歴史を学ぶ会」がつくられ、学生アンケートを行い、福音理解の再確認とすべく、このブックレットが作られたのです。

第2章　アンケートから

「愛国心」を巡って

最近は学習指導要領改訂を巡って、愛国心ということがニュースで話題になることがあります。2008年の学習指導要領の改訂では道徳教育の目標として「愛国心」が加えられ、「君が代を歌えるように指導する」と明確化されました。今までは学校の教員にのみ課せられていたのですが、これからは児童・生徒も「君が代を歌う義務」が生まれてきそうな勢いです。この「愛国心」を認めると右翼的、「愛国心」を否定するのがキリスト者的…そのような雰囲気の中で、キリスト者であっても正しい愛国心は必要だという声を聞くようになりました。しかしKGKでは「愛国心」という言葉を巡って、左寄りなのか右寄りか、あるいは政治的な発言か否かという発想から抜けだし、キリスト者として体系的な聖書の教えから考えるという思考回路に立ちたいのです。

アンケートの結果から感じるのは、日本人として国を愛することは大切であるという考え方が多くの人の根底にあり、日本人であることを感謝をもって受け止めたいという積極的な表明があるように思えました。また、消極的な人の意見としては、国家からの押しつけであることに対しての抵抗感があるように読みました。

ここで「愛国心」を巡って、いくつかのことを考えてみましょう。

まず第一に、愛国心という言葉の歴史について少し考えてみましょう。愛国心という言葉は１８世紀のヨーロッパで生まれたと、オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ氏が指摘しています。当時のヨーロッパは戦争の時代であり、ヨーロッパ諸国では軍隊への徴募や、軍事予算の増大に必要な重税の負担を市民に向けて説得するため、国に対する誇りを持てというメッセージを必要としました。現代日本の愛国心を導入しようとしている政府の考え方と非常によく似ています。愛国心とは、その起源において民衆からのものではなく「国家からのもの」であり、国家をひとつのスローガンのもとに統一するときに、国民が結束するときに用いられてきたものでした。その意味で、愛国心と祖国愛を分けて表現し、愛国心はナショナリズムや国家主義と結びつけ、祖国愛を伝統や文化と結びつけて考えるようにと提唱する歴史学者もいるようです。

第二に考えたいことは、聖書には「愛国心」と訳されている言葉が一度もないことを心に留めたいということです。旧約において神様はイスラエルの民を選んで愛してくださいましたが、そこに存在する在留異邦人も同様に大切にするようにと、なんども語りかけています。またヨハネの福音書では「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じるものがひとりとして滅びることなく、永遠のいのちをもつためである。」と書かれていますが、それは国家という枠組みで愛を語っているのではありません。

第三には日本の歴史の中で愛国心ということを考えるとき、日本人の愛国心のゆえに、アジア諸国の「国家」の自治が奪われただけではなく、従軍慰安婦などにおける女性の人権蹂躙、創始改名などに見られる人格の尊厳の剥奪、天皇や君が代を中心とした愛国心のために奪われた信教の自由などを、私たちはたとえ60年経った今でも、やはり思い起こさなくてはならないのです。私たちが愛国心とあまり深く考えずに口にする背後に、その言葉によって人生が大きく変えられ悲しみに生きている人の存在を思い起こすとき、私たちは愛国心ということばを用いることに、もっと慎重であるべきだということが分かってくるでしょう。

耳と心を閉ざしてはならない

アンケートの中では、「愛国心」ということばを自分の国の人を愛することとし、美しい心として理解したい素朴な気持ちを表明しているものが多くありました。日本の文化や伝統に対して造詣を深めていくことの重要性は十分に理解できます。また、戦争が60年前の出来事であり、昔の愛国心と今の愛国心は性質も違うのではないかと考えることもあるでしょ

う。

しかし、私たちは耳を澄ませて聞き取らなくてはならない声があります。「日本人として」あるいは「自分の国を愛する」という表現をするときに、その言葉のゆえに苦しんでいる人の隣人になることを通して、この国でキリスト者として生きることの意味を掘り下げなくてはならないのです。

まずは一般的な二つの例を考えて見ましょう。

第一は「中国残留邦人」と呼ばれる方々の存在です。先の戦争は確かに侵略戦争で、その国策に従って（中国）大陸に渡った多くの日本人がいました。しかし当然のことながら家族と共に大陸に渡って行った子供や現地で生まれた子供たちには侵略の意図などありませんでした。敗戦直前に旧ソ連軍の侵攻で日本人は離散し、残された日本人孤児（女児）たちは中国人に「嫁」として売られていったのです。幼い子供は自分の親の名前も親の顔もしらずに中国人として生き、1972年の日中国交回復で一時帰国し肉親と再会するという厚生省（当時）の支援によって、涙の再開をする「中国残留孤児」の姿を、テレビや新聞で多く見かけました。

「嫁」として売られていった幼い子供たちも、今や70代の方々で現在厚生労働省は「中国残留婦人等」と表現しています。日本政府は「自分の意思で結婚したのだから」と、彼女たちを日本人とは認めません。（実は男性は日本人として認定）。法務省は彼女たちを外国人扱いし、「帰国」には親族からの申請による身元保証が求められ帰国が大変困難です。彼女たちにとって日本人とは誰のことを指すのでしょうか？「日本人であることは誇り」と言えるのでしょうか。私たちが何気なく「日本人であること」を誇りに思っている背後に、その日本人であることを失ってしまった人々の回復を認めないのが、この国でもあることを知る必要があります。KGKのみなさんに市民運動家として活躍し彼女たちの裁判の支援者になることを励ましているのではありません。私たちが自分の置かれた場で、「日本」という国の実態に眼を向け、耳を澄ませば聞こえるはずの「声」をキリスト者としての耳で聞いてほしいのです。そこにキリスト者としての戦いがあることに気がついていただきたいのです。

第二の例は、「在日」と呼ばれる方々の存在です。この方は日韓併合によって「日本人」とされ、敗戦後1952年サンフランシスコ講和条約によって「外国人」としてみなされます。『「自分の国」を問い続けて～ある指紋押捺拒否の波紋』（岩波ブックレット）の著者崔善愛さんは牧師の娘でキリスト者です。10年程前のことですが崔さんの娘と私の子供が同じ幼稚園に通っていました。

日韓併合により「日本人」となり、敗戦と講和条約によって「外国人」とさせられた方々の二世・三世は日本で生まれ日本語しか話すことのできない「在日」と呼ばれる方々で、日本の政府から「外国人」として扱われ、

14歳になると外国人登録証に指紋をとられ、納税の義務は課されても選挙権はありません。彼女が指紋押捺拒否から始めた裁判では「日本は私の国、母国であることを、この裁判で訴えたいと思います。」と証言しているのです。「在日」の彼女が、その歴史に翻弄された人として日本を恨むのではなく、日本を母国にしたいと訴えても、それを拒否するのが「日本」なのです。

私たちKGKは、93年に外国に行って謝罪をしましたが、真に謝罪と和解を表す人々は「在日」という呼称でずっと日本に住み続けているのであり、「在日」の方々の教会も沢山あるにもかかわらず、そして大学生も多くいるにも関わらずKGKは「日本人だけ」のグループであったことが、この歴史と向き合わず、無邪気に愛国心を語ることのできるグループであったことを、主の前に問われる必要があると思います。

悲しい歴史は終わらない

崔善愛さんは、このブックレットの「あとがき」で、娘との会話を記しています。

七歳になる娘が、数日前、朝起きるなり私に聞いた。

「私は完璧な日本人？」

「完璧な日本人ってな～に？」と私。

「だってママは韓国人なんでしょ？」

「でもママは完璧な韓国人じゃないよ」

娘は早くも自分は人と違う者でありたくないと思っていた。

「完璧な日本人」でありたいと思うわが子に、私はなにかを語りはじめなくてはならない。

私は、崔さんと同じ幼稚園の保護者として過ごした経験から、60年前の戦争開戦の責任が直接なくとも、この戦争のために60年経ってもこのような親子の会話がなされる方が身近にいることを、もっと心に留め、その方々の声に耳を傾ける責任があることを痛感しました。そこから真の福音を伝える宣教も生まれてくるのだと実感しました。この牧師の娘である崔さんの人生が日本政府によって粗雑に扱われたことは本当に悲しいことでしたが、さらにキリストを信じる彼女のため、そしてそのような状況の多くの「在日」の方々が私たちの教会にもいるにも関わらず、日本の教会が深い慰めのことばを彼女たちに持たなかったことの源流に、戦時中の教会の罪を見出すことになったのです。

歴史を学ぶこと、それは一人の人の声に耳を傾けることと、大きな流れの中で歴史を理解すること、この両方が大切だということを、私たちはIFESの交わりの中で教えられてきました。93EARCでの韓国の方々の対

応によって、私たちは目が開かれたことを、遅かったことを心の痛みと共に認めながら、交わりに感謝しつつ歩みたいのです。そして歴史を学ぶ中で国家の犯した罪と向き合うと共に、その故に悲しみを担った一人一人の隣人となることが、キリスト者の生き方となるのです。

聖書を土台に生きる

アンケートの中に「特定の政治的立場や特定の国を擁護するようなやりかたは、好ましくない。クリスチャンに必要とされているのは『真実を知ること』『愛を実践すること』だから、聖書に書いていないことを並べて論理を飛躍させるべきではない。」というコメントがありました。このような意見を多く聞きます。KGKが一定の政治的な立場をとっているということに対しての懸念の声も聞きます。

確かにキリスト者が「特定の政治的立場や特定の国を擁護するようなやりかた」は好ましくありません。聖書は一定の政治形態や一定の国家を特別視したり、普遍的な正義としてはいません。「君が代」や「靖国問題」を話題にすると、必ず政治的な立場に結びつくと思われがちですが、私たちはこの世の様々な出来事に、聖書から答えを見出し決断し生きていくことが求められているのです。「政治的」ということと、政治に意味をもたらすことは似て非なるものだと言えます。逆に一定の政治的問題から距離を置くことが「非政治的」になるわけではありません。むしろ歴史の中では、政治的なことがらに距離をおいていた教会が、じつに政府の政策に翻弄され、政府の政策を無批判に受け入れていった歴史が日本の教会史には散在しているのです。

私たちの使命は、KGKを通して出会う一人一人、またIFESを通して出会うアジアの兄弟姉妹一人一人の、人生の悲しみや痛みに耳を傾けていくとき、「君が代」「戦争」「靖国」に対する理解がなくては、隣人になること、つまり「真実を知ること」と「愛を実践すること」はできないということを知ることからはじまります。大きなテーマでありながら、一人一人との対話の中でしか学べないのが、真実の「歴史」なのです。このようなテーマに、私たちが聖書を土台にして理解し発言し、行動していく場合、そのような深い信仰告白が政治的な意味を持つこともありえます。

明治政府が限定付ではありましたが、信教の自由を認めるに至った背景には、まだ「キリシタン禁令下」にあった明治政府の中で一人の女性が信仰を告白し、また仏教式の葬式を拒否したところから、政府の大弾圧が起こり、開国した日本に欧米からの非難が集中し、不平等条約の解消が暗礁に乗り上げたことから、信教の自由を明治政府が認めるにいたりました。ひとりの女性の素朴な信仰告白が、国家をも巻き込む大きな出来事となっ

ていったのです。これは政治的な立場や信教の自由という憲法論議からスタートしたのではありません。このように信仰者が真剣に生き抜くとき、神様が必要とされるとき、それは高度に政治的な意味を持つことがありうるのであり、そこに信仰とこの世との深いつながりがあるのです。

第3章　この国で教会を建てあげるために

この世の主権者

靖国問題や、「在日」の方の苦しみに、その他戦争で傷ついた多くの方々に対し、つまりこの地上で悲しみを背負って生きなくてはならない人々のために、キリスト教会はどれほど慰めの言葉と、愛の実践をしてきたかということは、改めて問われるべきでしょう。一人一人の声に耳を傾けようとするときに、愛の実践のあまりにも貧しい自分自身の姿に直面せざるを得ません。

松尾兄の証の中に、君が代の問題で公立小学校のキリスト者校長に相談したとき、ローマ書13章1節を引用し、「松尾さん、上に立てられた権威について従うべきです。と聖書に書いてあるでしょう？だから大丈夫です」とアドバイスを受けたと書かれていました。聖書を引用して「君が代を歌ってもいい」というアドバイスだったのです。この聖書の理解について考えてみましょう。

この聖書箇所は、キリスト者が国家に対してどのような態度で生きるべきかということについて書かれてあります。アンケートの回答にあったように「聖書に書かれていないことを並べて論理を飛躍させて」はなりませんが、聖書は神様の主権と国家との関係については明確に記されています。この箇所は13章1節だけを読むと、あらゆる権威に「従うこと」こそキリスト者の生き方のようにも読めますが、4節まで読むと「それは彼（上に立つ権威、ここでは国家のこと）があなたがたに益を与えるための神のしもべだからです。」とあり、この13章全体を読むと、基本的に上に立つ権威は神様が定めたものとして従うべきですが、その権威の上に真の主権者である神様がおられ、その神様の御旨からはずれる国家に対し、私たちは「否」という責任も与えられていること、さらにその国家に対して神様が委託された働きを見守る責任があるのだということが、ローマ書13章から理解すべき内容です。使徒たちも「人に従うより、神に従うべきです」と述べており、あらゆる権威に盲目的に従うことがキリスト者の生きかたではないことは明らかです。私たちは真の主権者を見出して生きるとき、この地上の主権者とぶつかることもありえます。キリスト者として生きるということは、この世の権威と対立することもありうるということです。

そのとき『対立することは、伝道熱心な立場から「証にならない」』と考える人がいます。一般的にキリスト者であれば「証にならない」という忠告には弱いものです。「和」こそもっとも価値のあるものだという日本的性質が、真理の前に生きる生き方に負けているのかもしれません。そのようなとき、立ち止まってじっくり考えてみてください、「証とはなにか？」ということを。歴史の中でこの世の権威と信仰者としての生きかたを静かに対決させながら、深い証を立てた人が多かったのではないでしょうか。宗教改革もまた、当時のカトリック教会に対する抵抗からスタートしたのではないでしょうか。信仰を貫くときに、妥協できない状況に直面することがあります。その時、社会に対して摩擦を生み出したり、時に政治的な意味をもってくることがありますが、そのときにも心を騒がせることなく、しっかりと信仰を貫く備えをもって生きることが大切です。

歴史観が崩れた日本の教会

日本の教会の歴史も、聖書の一部を受け止めながら、天皇制に彩られた政府の政策に大きく揺るぎ、むしろ積極的に国家に従属し、その結果キリスト教会は国家神道のしもべとなっていったという、驚くべき歴史が刻まれています。実際の例から考えて見ましょう。1940年5月に日本のキリスト教会は「皇紀2600年奉祝全国基督教信徒大会」を開催しました。まずは、宣言文の一部をご紹介します。

宣言

神武天皇国を肇め給ひしより2600年皇統連綿としていよいよ光輝を宇内に放つ光栄ある歴史を懐へて吾等うたた感激に耐えざるものあり。

本日全国にある基督教徒相会し、つつしんで天皇陛下の万歳を寿き奉る。惟ふに世界情勢は極めて波乱多く一刻の偸安を許さざるものあり。

西に欧州の戦禍あり、東に支那事変ありて未だに終結を見ず、此の渦中にありて我国よくその進路を謬ることなく、国運国力の進展を見つつあり。これまことに天佑の然らしむる処にして一君万民尊厳無比なる我が国体に基づくものと信じて疑わず。

今や世界の変局に処し、国家は体制を新たにし大東亜新秩序の建設に邁進しつつあり。吾等基督教徒もまた之に即応し教会教派の別を棄て、合同一致以って国民精神指導の大業に参加し進んで大政を翼賛し奉り、尽忠報国の誠を致さんとす。

茲（ここ）に吾等は此の記念すべき日にあたり左の宣言をなす。

1　吾等は基督の福音を伝え救霊の使命を完ふせんことを期す。

1　吾等は全基督教会合同の完成を期す。

1　吾等は精神の作興、道義の向上、生活の刷新を期す
昭和１５年１０月１７日　　皇紀 2600 年奉祝全国基督教信徒大会

この宣言は、日本のキリスト教が天皇制に飲み込まれた姿の一面です。現在の教会で学ぶ機会はありませんが、日本の教会は先の戦争のとき、国策に従って国家神道の神である天皇を拝み、礼拝で「君が代」を歌い（賛美歌の中に君が代が入っていました)、神社参拝までしていました。この宣言文で考えるべきポイントは、歴史観、天皇制、侵略戦争への支持、報国（滅私奉公へと発展していく）という概念です。

まずは歴史観ですが、創世記からの終末に至る歴史を機軸に考えるのではなく、紀元節つまり神武天皇が即位してからの歴史を、キリスト者としての歴史の機軸にしています。これは歴史の支配者が私たちの主イエス・キリストであることを放棄したことにさえなるのです。この紀元節は、現在の建国記念日として戦後に復活していることは大きな問題です。戦後に制定された「建国記念の日」はまさに戦前の紀元節の復活です。現在でも多くの教団教派をはじめとする教会がこの日を「建国記念の日」とせず、「信教の自由を守る日」として定め、天皇制や歴史の学びの時として定めています。

二番目に問われるのは「天皇制」に関する理解でしょう。この天皇が国家神道の神であり、天照大神の末裔である現人神であることを問題にせず、無条件に天皇の万歳を願っています。またその天皇の治める国のかたち、つまり「国体」が世界平和の秩序だというのです。「臣民としてのアイデンティティ」をもったキリスト者として歩み始めたのは、けっして天皇制のもとの迫害の結果ではなく、自ら進んで「臣民」として生きようとしたことの結果です。日本人が国家や大きな危機に直面したときに問われるアイデンティティが、天皇に統合される全体性にあることを表しています。

三番目の視点は、侵略戦争への支持ということです。現在はどちらかというと「新しい歴史教科書をつくる会」の歴史観を批判する立場にあるキリスト教会ですが、当時は自ら侵略戦争を正当化していました。大東亜共栄圏を建設することに積極的な日本のキリスト教会が、悔い改めることなしに現在の教科書問題を批判しても、力がないのは当然です。過去にこのような歴史があったことを隠さず、悔い改めと共に若い世代に伝える必要があります。現実には、教会の教育の中で「教会の罪」についてはほとんど学ぶ機会がありません。教会は現在戦争反対の立場で平和主義を謳っているようですが、キリスト教会から戦闘機などを献品していたのです。この侵略戦争への支持が、単に戦争支持ということにとどまらず、宣教さえも、日本の思想の土台にたった宣教を展開していきました。それが「大東亜共栄圏にあるキリスト信徒に送る書簡」などにつながっていったのです。

そして「報国」ということが信仰をもつことのゴールであるかのように、次第になっていきます。

キリスト教を信ずることをもって、お国のために生きますというのが、この宣言の趣旨であるのですが、それは信仰のはなはだしい誤解であるといえます。この報国というかたちで忠誠心が問われ、その生き方としては滅私奉公が問われるのです。

私たちが本当に愛し仕えるのは、限定された国家ではなく「神と人に仕える」ことであるはずです。

日本人にとって「お国のために」ということが何よりも美しいことばとなっていた時代、キリスト者もそれに合わせていました。お国のためにという言葉は、突きつめていくならば「私の存在理由は国家です」ということになります。自分の存在の土台に吸収されていくことをもって幸福と考える価値観が、私たちの中にも根強く残っている可能性を否定できません。ときには教会の奉仕でさえ、「報国」ならぬ「報教会」にすり替えられることさえあるのではないかと懸念します。

日本人という集団への帰属意識を、キリスト者としての生きかたによって乗り越えることができなかったことを、私たちは心に深く留めなくてはなりません。

アジアとのかかわりの中で

戦時中、文部省（現在の文部科学省）のもとに、あらゆるキリスト教の教派は「合同」し、日本基督教団が成立しました。信仰告白による一致ではなく、文部省からの要請にしたがってひとつの教団になったのであり、教会の自治を政府に明け渡してしまったのです。日本のキリスト教会が「日本人」として、神社参拝をし「君が代」を歌うまさにその同じ時代に、韓国のキリスト教会には、神社参拝を拒否する運動が起こり、2000人以上の信徒が投獄、50余人の牧師・長老が殉教しました。その教団の責任者富田満氏は1938年6月30日、次のような演説を行うのです。

「諸君の殉教的精神は立派だが何時日本政府は基督教を捨てて神道に改宗せよと迫ったか、その実を示して貰ひたい。国家は国家の祭祀を国民としての諸君に要求したに過ぎない。警官が個人の宗教思想を以って諸君に迫ったというが国家は斯ることを承認してはいない。基督教が禁圧せらるるときにのみ我らは殉教すべきである。明治大帝が万代に及ぶ大御心をもって世界に類無き宗教の自由を賦与せられたものを浸りに遮るは冒涜に値する。民間学者は勝手なことを言う。それを一々気に留めては諸君の方向を誤る」（『福音新報』1938年7月21日）

この演説に対し、歴史家の金田隆一氏は、「神社参拝を拒否する朝鮮キ

リスト教会と、日本の教会とが、もし国家から同一視されるならば、やがて累は直接日本の教会自身に及んでくるであろう。教会当局者が最も恐れたのはこのことであった。」と述べていますが、それは当を得た解釈だと思います。

93EARC で、戦争責任について KGK は謝罪しましたが、キリスト者としては、日本人牧師が偶像礼拝を強要する説教をし、さらにそのような罪の歴史的な事実を次の世代に教えない歪んだ歴史認識と罪意識の浅い日本のキリスト教会でありつづけることを、若い世代が変えることができていないことをも謝罪し、日本の教会が変えられるように仕えることを約束し、帰国してから生き抜くべきではなかったのでしょうか。そしてそれから 15 年、KGK の先輩方がアジアの兄弟姉妹にした約束に生きるために、再び対話をもつ機会を与えてくださったのが 2008 年 EARC なのです。(この原稿は EARC 前に書き上げています)

さらに、日本のキリスト教会はアジアの兄弟姉妹に次のような書簡を送りました。この手紙は「公募」であり賞金付だったことも、驚きです。戦後日本のキリスト者がアジア諸国に赴いた時にかつての侵略戦争を謝罪する場面に時々出会う時があります。ほとんどの謝罪が「かつての侵略戦争」に対する謝罪です。しかし、キリスト者として本来謝罪すべきは、私たち日本人キリスト者が神の前に不忠実であったことであり、そのためにこのような手紙を送ったことであり、日本のキリスト者が植民地において、神社参拝は偶像礼拝ではないと説明したことです。

大東亜共栄圏にあるキリスト信徒に送る書簡（抜粋）

序文

今ここに日本基督教団が大東亜共栄圏内の諸教会および同信同志の兄弟たちに書簡を送るゆえんは、キリスト教が「大いなる歓喜の音信」であるという信仰に基づくためにしてこれを現代の使徒的書簡とし称するも言い過ぎではなかろう。

第一章

兄弟たちよ、諸君と我らとを結ぶ第一の絆は、我らが相共にしこの聖戦に出て征く戦友同志であるという深い意識である。次に我らを種々の相違にも関わらず一つに結ぶ第二の、しかも決定的な絆は、我らが共に主キリストを信じ霊的に彼の所属であるということである。

第二章

全世界をまことに指導し救済しうるものは、世界に冠絶たる万邦無比なるわが日本の国体であるという事実を、信仰によって判断しつつ我らに信頼せられんことを。相共に深い決意をもって神の国をさながらに地上に出

現せしめるとは、われらキリスト者にしてこの東亜に生を享けし者の衷心の祈念であり、最高の義務であると信ずる。

第三章

（日本基督教団成立に関して）これはただ神の恵みの佑助にのみよるわれらの久しき祈りの聴許であるとともに、我が国体の尊厳無比なる基礎に立ち、天業翼賛の皇道倫理を身に体したる日本人キリスト者にして初めてよくなしえたところである。

第四章

隣人愛の高き戒命の中にあの福音を聞き信じつつ大東亜共栄圏の建設という地上における次の目標に全人を挙げて全力を尽くさなければならぬ。われらはこのことを諸君に語る前に自分自らに語っている。（第一テモテ２：３）我らの盟友にして戦友よ、「汝らキリストイエスのよき兵卒として我らと共に苦難を忍べ」

この手紙もまた、皇紀2600年奉祝全国基督教信徒大会と同じように、歴史観から始まり、キリストの名を語りながらも、「天皇に従う日本人としての生きかた」を、アジアの兄弟姉妹に強要しています。

この時代、ホーリネス教会は教義を以下のように変更しました。

「我らは主イエスキリストが栄光のかたちをもって再臨したもう事と、その時キリストに在り死にし者はよみがえらせられ、地にある聖徒は栄化され、ともに空中に携え挙げられ、後、地上に神の国の樹立せらるべきことを信ず。」という告白を、「我らは主イエスキリストが栄光のかたちをもって再臨したもう事と、その時キリストに在り死にし者はよみがえらせられ、地にある聖徒は栄化され、ともに空中に携え挙げられ、後、神の国の来る事を信ず。」、「地上に神の国」が樹立されると、天皇支配と思想がぶつかるので、「神の国」という言葉を抜いてしまったのです。

このようにキリスト者として生きるという形だけの「信仰」をもちながら、当時の日本社会のあり方や要求される日本人像を受け入れ、対立しないように生きようとしたキリスト教会こそ、わずか60年前の日本の教会の真実の姿なのです。ホーリネス教団は戦後50年を機に、これからのことに明確に取り組み、戦争時代の罪の告白をしています。いくつかの教団でも、戦後50年に謝罪文や告白文を出していますが、素朴に考えてみてください。教会が明確な偶像礼拝の罪を犯したにも関わらず、悔い改めるまでに50年という時間がかかってしまったことの意味を深く掘り下げてみていただきたいと思うのです。

戦争直後の教会

それほどまでに罪を犯し続けた日本のキリスト教会でしたが、1945年8月28日、教団戦後最初の理事会では次のような記録が残っています。「今日の戦争終結は、日本国民として、悲痛の極みである。けれども陛下の聖旨により出たる以上、承詔必謹する他ない、我々は今後如何なる苦難が生じても、耐え難きに耐へ、忍び難きを忍びつつ、新日本の建設に邁進すべきである。また、同時に注意すべきは、英米との関係、特に外国宣教師との問題である。…しかし以上のことは個別に、日本基督教が従前よりも有利な立場に置かれたこともまた事実である。満州事変以来、基督教は圧迫を蒙り、教学伝道等に不自由を感じてきたが、今や自由に説教をなし得ることになった。されば今後の教会が復興しないとしたら、それは我々の責任であろう。それと共に我々は敗戦降伏の事実を正しく認識し、上御一人と共に苦しみ、国民と共に懺悔し今後の日本再建のために全力を尽くさねばならぬ。」(『東京教区史』日本基督教団東京教区編)

ここでも天皇の判断によって戦争が終結したのであって、今後も上御一人、つまり天皇と力をあわせていこうという宣言にしかすぎず、自分たちが神社参拝をしたことを悔い改める文章はまったくありません。敗戦後であっても、自分たちの罪をまったく理解していないのです。戦時中は神社参拝を強要されたという証言が多くありますが、その強要がなくなった8月15日以降であっても、そのことを悔い改め、言及がないことはどうしてなのでしょう。まったく罪を認識できなかったと言わざるを得ないのです。そのように考えてしまうもう一つの文章を紹介します。

1946年1月20日 「戦争中における教団立法行政の実相―戦争責任は何か」(『日本基督教団新報』1946年1月20日号所収)「第一に基督教団関係者は、その教団たると否とに拘らず、能動的に戦争を指導した覚えは毛頭ないのである。基督教を奉ずる限りそんな行動、言論には出られる道理はない。軍部・政治家が発企し、実施しつつ戦争が果たして正義に殉ずるものであるか否かさえ教団を始め基督者一同危ぶんだ。(中略)教団は政府、軍部の強調する戦争目的をそのまま、部内に伝ふることを命じられ、其の与えられた資料によって判断して、それが正義であると認めた処を要求せられるがままに内部に宣伝したのである。言ふまでもなく虚偽と知りつつ行なったのではない。軍部・政府を信頼して、安心してそれを取り次いだままである。(中略)問題は戦争を計画し、実施し、敵愾心を鼓舞し、復讐を奨励しか否やに在らう。苟も基督教職、信徒にさうした人物があるべき道理はない。」

戦争が終わって翌年になっても、自分たちの神社参拝などの罪にはふれず、むしろ「政府から言われただけであって、自分たちは悪くない」と言

い訳をしています。ここには、キリスト者としての信仰を貫く生きかたはまったくみられません。たとえ世の中がどのようになっても、自分の人生の土台は聖書であり信頼すべきは聖書であって「軍部や政府」ではないことをローマ書 13 章をしっかりと学んでいたなら、いえ聖書全体から学んでいたならば、そして歴史の真の主権者が神様であることを深く理解していたなら、戦時中の教会はもっと違った歩みをしたのではないでしょうか。さらに悔い改めを回避するような言い訳をすることはなかったでしょう。

第 4 章　天の都を目指して

歴史から遠ざかる福音派の教会

かつて熱心に聖書を読み、キリストを信じながらも、聖書全体の世界観・歴史観から学ばずに罪を犯した教会のあり方は、私たちに大切なことを教えてくれます。現在の私たちが歴史から学ぶことがなければ、時代の変遷の中で神の国を建てあげることができなくなってしまいます。その視点で自分達の生きている時代や社会をみつめ、歴史を神様の主権の中で理解することを通して、現在を見る視点を養うことは、福音に生かされた者として現代を地の塩・世の光として生き抜くことになるのです。

アンケートの結果からも伺えるように、戦後 60 年を過ぎた日本には、少しずつキリスト者の中にも、歴史を検証せずに「愛国心」をよいものとして受け止める人や、「君が代」を歌うことには問題を感じないという人が増えてきています。教会の中でも「キリスト者は政治的なことには関わらない」という立場を維持しようとすることを通して、私たちが地上のどこに足場を置くかということが分からなくなる人が再び増えることでしょう。結果として、信仰を心の中だけのことにとどめることを通して、福音に生きることが非社会的・非政治的なものになっていくのです。信仰が心の中だけにとどまるときに、私たちの信仰はますます力を失います。そして、力を失ってしまった信仰になったと気がついたときには、世の中の流れにはもはや抵抗できない骨抜きの信仰になってしまうのです。

多くの人が「君が代」や「愛国心」、「靖国」の問題は信仰の問題ではなく、自由に判断できる問題だと思っています。その人たちは「いざとなったら、命をかけても信仰を守り抜く」というのですが、まさにこの現在、歴史を生き抜くことを通してこの地上で堅く立つことができなければ、この国家や社会が襲い掛かってきたときには、骨抜きの信仰となって太刀打ちできないことになっているというのが、私たちが歴史から学ぶことなのです。なにもいますぐ国家と戦わなくても、常に歴史に生きることから地上でしっかりと立つこと、「真実を知ること」「愛に生きること」に生き抜くときに、

大学の中で、また就職して社会の中で真実にキリストの祝福をもたらすものとして生きることができるようになるのです。

最近のことですが、JEA（日本福音同盟という福音派の諸教会の連絡機関であり、KGK 学生が集っている教会のほとんどが加盟していると考えられます）社会委員会が 2007 年 6 月 5 日付けで「信教の自由をおびやかす国家主義的動向を危惧し、政教分離の原則を堅持していくことを強く訴えます」というタイトルの卓越した文章が発表されました。しかし、残念ながら戦時中の教会の出来事に関しては『当時の日本の教会は、大勢として神社参拝を行い、戦争に協力する道を歩むという苦汁の経験をさせられました』という表現でした。JEA は福音派の諸教会の集まりとして信頼できる団体です。この JEA でさえ「苦渋の経験をさせられました」と受身形で書かれてあることに、私達キリスト者は、この歴史の課題を乗り越えていないと感じるのです。明確な罪の意識が文章化されていないこと自体が大きな課題点です。社会委員の牧師たちの歴史の認識が浅いということではありません。多くの場合、歴史認識を深めても、戦争中に偶像礼拝をしていた牧師たちやその家族たちを糾弾することになることを避けるために、このような文章になっていることが多くあります。歴史認識を正しく学んでも、そこから痛みを持っている方々との心からの対話がないかぎり、偶像礼拝に陥ってしまった戦前戦中の牧師たちへの配慮が優先してしまうのです。もちろん日本人でも戦争のゆえに痛みを持って生きている人々は多く、戦時中の牧師たちの苦悩への配慮は必要でしょう。しかし謝罪を繰り返しながら、アジアのキリスト者よりも再び日本人の先輩キリスト者との関係を大切にしてしまうことを繰り返してしまうなら、私たちキリスト者の交わりが、日本人としてのつながりを越えられなかった戦時中の体質と同じままであり、謝罪が和解には至らないものとなってしまいます。私たちが誰と対話をしながら信仰を確立していくかということが問われるところです。残留邦人や在日、さらに多くの「愛国心」の元に苦しんできたアジアの兄弟姉妹との交わりや対話の中から私たちは自分の姿を教えられる必要があるのです。

このひとつの文章だけをもって JEA という団体を批判すべきではありませんが、このような文章が出てくる歴史理解に対しては、静かに毅然とした態度をとり、キリスト者としての世界観を確立していくことが、真にキリスト者として神の国を建てあげるために大切なことです。

私のような世代であっても、このような問題意識について意見を述べると「若い者になにがわかる！」とお叱りを受けることが多くあります。しかし、正しい歴史観をもつことのなかった戦前から戦後にかけて牧師をしていた方々の大きな声にモノがいえなくなってしまうという日本人の人間関係の持ち方に、福音を携えて静かに立ち向かうこともまた、真の教会を

建てあげるため、若い世代に与えられた使命でもあるのです。年齢が上でも下でも、疑問に思ったことを丁寧に話し合い、経験からではなく何が聖書から語られる罪であるのかを理解する土壌を生み出すことが大切です。

歴史を形成する責任

戦時中に韓国まで出かけていって神社参拝を韓国のキリスト者に強要し、日本でも伊勢神宮参拝した記録などを教団の機関誌に掲載していた富田満師に対して、戦後このような文章が残されています。

「富田先生が一人のフリーな人として振る舞われたら、官憲に盾突いて殉教なさったかもしれないと思います。しかし、富田先生は統理者として日本の全基督教会を率いるものとして判断して、あのようなことをなさったのではないかと思います。先生のなさったことは決して非良心的なことではなかったのです。」

つまり、教会を守るために「神社参拝」をしたのであって、そのような教会（教団）を守る責任がなければ殉教するほどの信仰だったと回想しているのです。私は、このような発想そのものが大きな問題をはらんでいるのだと考えています。神社参拝までして守らなくてはならない教会とは、一体どういう教会なのでしょうか。団体の責任者であることと、個人で発言することと、信仰の本質においてはまったく同じ発言をする必要があります。私たちの信仰は時代や国家の要請によって変更するようなものではないはずです。2003年NCに講師として奉仕された渡辺信夫師は、著書『今、教会を考える』（新教出版社）で次のように述べています。『彼ら（日本の牧師をはじめとするキリスト者たち）は戦時中自分たちは苦難に遭った。敗戦によって苦難から解放された。今や大いに伝道すべき時期である、と言っていたように思う。戦争中の妥協が取り上げられることがあると、それは教会を守るための止むを得ない処置であり、それはむしろ功績であると言わんばかりの弁明がなされた。だが、信仰的妥協をしてまで守らなければならない教会は、本当の教会、すなわち「われは教会を信ず」というときの教会なのだろうか。戦後5年して、朝鮮戦争が始まったとき、それまで「平和」、「平和」と言っていた教会人たちがいっせいに黙りだした。私は、おかしい、と思った。ちょうど、戦争に向かう社会の中で、おかしいと感じたのと似ている』つまり、教会は社会の中で福音を宣言し、福音によって神の国を建てあげる使命をもち信仰告白によって立つものであるにもかかわらず、社会が神社参拝をすれば教会もそれに習い、戦争が終わって社会が平和といえば、平和を叫び、朝鮮戦争が始まると平和を叫ぶのをやめて教会の中にとどまりはじめたというのです。

近年でも、1985年にヴァイツゼッカー大統領の演説が世界的に評価を

受けると、教会も過去を見つめ始め、戦後50年では社会が「謝罪」ブームの中で、教会も謝罪をしました。そして1999年国旗国歌成立あたりから、キリスト教会の中に深いあきらめムードを感じるのです。それまでは反対していた人たちまで沈黙するようになり、さらに関心さえなくなって行きました。やはり世の中と同じです。前出の渡辺氏は同じ著作の中で「私にとって一番問題なのは、昔もそうであり、今もそうであるが、教会が流されていくこと、流されるままに言う内容も変わっていくこと、しかも流されていることを認めないこと、である」と述べています。

私たちKGKの学生は、IFESを通してアジアの兄弟姉妹との交わりの中で教えられた歴史認識を福音によって研ぎ澄まされていくときに、将来への希望と、神の国を建てあげる教会の使命を、自分たちの置かれた場所で、謙遜にしかも一歩も譲らずに、信仰告白の場所に立ち続けなくてはならないのです。

真剣にキリストの十字架を告白する人生を送るなら、結果としてこの社会に迎合せず、立ち向かい、時には政治まで動かす大きな力をもつことにもなるのです。もちろん、そのような大きな力をもたずとも、私たちの周囲のたった一人の人の隣人になろうとするとき、私たちはその隣人を苦しめているものに立ち向かう生きかたをしようではありませんか。

KGK学生の使命

神様は、この地上における福音宣教を教会に委ねました。教会は罪からの救いの福音を宣教すると同時に、その福音を信じた者にふさわしい生き方として、貧しいものへの配慮や、在留外国人への愛の配慮、やもめに対しての教会の姿勢などなど、この地上での具体的な愛の実践に関して、多くのことが語らました。魂の救いと、この世で真実と愛に生きることはひとつのことだというのが、私たちが信じている福音なのです。

現代日本において、私たちが日本人であることを誇りに思うとか、国を愛するというのであれば、その国に住みながらも日本人として生きることができず悲しみに生きている人々、その国家の枠組みのために人権が認められない人たちへ愛の実践をすることこそが、私たちにとっての日本人キリスト者としての使命です。日本人としての誇りに生きるのではなく、キリストの使者としての福音に生きる責任を果たし、その使命を与えてくださった主を誇る人生を送ることに魂をささげるべきだと考えます。

前述した「自分の国を問い続けて」の著者の崔善愛さんは、1999年衆議院内集会で「日の丸・君が代」の法制化のことを在日の立場から話して欲しいと依頼を受けます。そのことを彼女は次のように語っています。「これらのことについて、公の場で話すことには命の危険を感じ、三歳と七歳

の子どものことを思うと、胃のあたりが緊張したほどだった」「『日の丸・君が代』の本に、日本人と多くのアジアの人々が残酷に殺されていったことは、歴史に刻まれているのではなく、一人ひとりの体の中に、心の中に刻み込まれ、そのまま今も生きつづけている」と述べています。その彼女が、キリスト者として「日本こそ母国である」と告白し、日本人を愛し、家族を愛し、音楽を愛し（現在、彼女は音楽家）、キリスト者として生きているのです。

私たちは、アジアの方々・在日の方々の「心の中に刻み込まれている」悲しみを踏みにじるような生き方をしてはならないのです。そのような教会を建てあげてはならないのです。そのような教会はやがて来る神の都に続く教会ではないからです。現代日本社会における様々な問題、そして心の中に刻み込まれるほどの悲しみを真に癒すことのできるのは、キリストの愛しかないと告白しているのが私たちです。その私たちが、今のようなかたちでの「愛国心」の名のもとに君が代を歌うことができるでしょうか。

日本の教会は戦争に賛成し、神社参拝をし、ましてや海外の兄弟姉妹にまで偶像礼拝の罪を強要するという大きな罪を犯してきたのですから、私たちはしっかりと歴史を見つめ、悔い改めの実を結ぶことを通して教会を建てあげるために、恐れずに日本の教会の歴史に直面し、天に国籍があるというなら国籍・国境によらず、キリストにある兄弟姉妹のために隣人として生きる決意をすることです。

自分の人生を、「やりたいことをやり、充実した人生を生きる」ということに心を費やすだけではなく、私たちの人生はやがて来る神の都において完成することを、聖書を土台に真剣に受け止めましょう。教会が戦時中に歴史認識を誤り、聖書の読み方において過ちを犯したことの真実をしっかりと見つめ、真に悔い改めることこそ、教会を建て上げることになるのです。この地上で責任を果たし、やがて来る神の都の建設のために深い貢献ができるのです。学生時代に、さらに深い聖書の理解に進んでいくことを通して、確かな福音に生きることを求め、共に歩んで生きましょう。

第５章　考えてみよう

№1「日の丸・君が代」の問題点は何でしょう？

まずは、以下の現役の学校の先生の文章を読んでみてください。

＜岐阜県公立学校教員のコメント＞

何で君が代歌っちゃいけないのか。何で日の丸に礼をしちゃいけないのかさっぱり分からない。牧師に聞いても「ゆっくり勉強しようね」と仰るばかりで、いっこうに分かるように説明してもらえない。「世と教会」関係の文章や講演で「分からないのは変」と頭から決めつけられているようで、読む気、聞く気、行く気になれない。職場に日教組の反対ポスターがはってあったので、取りあえず歌わなかったけれど、それは「クリスチャンなのに君が代歌うの？」と驚かれないために他ならない。自分がわからないからって、他人のつまづきになるようなことをしていいっていう理由にはならないだろう、と、それ以上の動機はない。でも、わからないのに従うって、なんとなくカルトみたいでイヤだ。ちゃんと分かるように説明してくれない？

（日本キリスト改革派「世と教会」に関する委員会『2000年度卒業式・入学式における「日の丸・君が代」の取り扱いに関するアンケート結果』）

【質問１】さて、あなたはこの学校の先生に、「日の丸・君が代」の問題点を説明できますか？

以下の文章は実際に1999年、ある学校での職員室で、学校長が「日の丸・君が代に反対するクリスチャン教師」に対して述べた「主張」です。

- 今の社会情勢のありかたを考えなくてはならない。
- 学習指導要領に基づいて。
- 卒業式、入学式に厳粛な気分を味わうため。
- 諸外国の考えを考慮する。国際化の時代にちゃんとした理解、国際理解を教員は子供に教えていかなくてはならない。
- 公的機関として教育する。
- 教員、生徒の思想信条を犯すものではない。
- 職務を考えてほしい。
- 昔こうだったから「日の丸・君が代」がダメだというのではなく、これからこういう日本を見せるんだ、新しい社会を作っていくことを示す必要がある。
- ものに対して敬意を表すことは大事で教育していかなくてはならない。

【質問 2】あなたは、この未信者の学校の校長先生に「何が問題なのか？」を、説明することができますか？

(考えるヒント)

君が代の偶像性についても、認識する必要があります。大嘗祭などを考えると、現在の天皇制が「象徴天皇」であって政教分離の原則から逸脱しています。「教員、生徒の思想信条を犯すものではない。」という校長の発言を中心に考えてみたいと思っています。

「君が代」は、天皇を指すわけですが（戦前の文部省も現在の政府も答弁しています)、この天皇が戦前は「現人神」となり、戦後は「象徴」となるわけです。なにが「神」であるかという判断の主体性を「政府答弁」に委ねているところにも問題があると思えます。

大嘗祭を伴う現天皇制は、国家神道と深く結びついています。なによりも、「何が宗教であり、何が宗教でないか」を決めるのは私たち個人に委ねられています。国家神道に基づく教育をしてきた日本にとって「君が代」は特別な問題であるはずです。「教員、生徒の思想信条を犯すものであるかどうか」は、学校にそれを決める権利はないのです。この校長の言葉は、何が宗教であり何が思想であるかという根源的な問いを、教員や生徒から奪ってしまっているのです。

そのことが、この校長を例にした現代の日本の思想的問題であろうかと思います。この根源的な問いを剥奪された教員や生徒が、高い人権意識をもつことはむずかしいでしょう。私たちは、問いを自由に発する権利をもっています。このことは、キリスト者の中でも「問うことの自由」を福音の恵みのなかで位置付けられているでしょうか？人生の様々な出来事の中で、「神様どうしてですか？」と信仰をもって問うことは許されています。問い掛けることが不信仰のように自ら決め付けていませんか。そして、聖書に権威があることを当然のこととして生きるところに、私たちの信仰の主体性があるのだと思います。

№2 日本に信教の自由はあるか？寛容の問題をめぐって

山口県殉職自衛官合祀事件

自衛隊の OB 集団である社団法人隊友会の山口県支部が、県出身の殉職自衛官を山口県護国神社に合祀したいと希望し、自衛隊山口県地方連絡部職員の協力を得て、1972 年 3 月、県隊友会長の名義で護国神社に合祀申請を行い、この結果殉職した自衛官は祭神として合祀された。殉職した自

衛官のキリスト者の妻（原告）は、合祀申請行為は原告及び亡夫の宗教的人格権を侵害しているとして損害賠償と合祀申請手続の取消をもとめていた。

最高裁判決論旨

地連職員の具体的行為は「その宗教との関わりあいは間接的であり、その意図、目的も、合祀実現により自衛隊員の社会的地位の向上と士気の高揚を図ることにあったと推測され」「どちらかと言えばその宗教的意識も希薄であったと言わねばならないのみならず、その行為の態様からして、国又はその機関として特定の宗教への関心を呼び起こし、あるいはこれを援助、助長、促進し、または他の宗教に圧迫、干渉を加えるような効果を持つものと一般人から評価される行為とは認めがたい」とし、「宗教的活動とまでは言うことはできない。」とした。

「信教の自由の保障は、何人も自己の信仰と相容れない信仰を持つ者の信仰に基づく行為に対して、それが強制や不利益の付与を伴うことにより自己の信教の自由を妨害するものでない限り寛容であることを要請していると言うべきである。」

つまり、裁判所が、元自衛官の妻に対して「このことで不利益を受けたわけではないので、もっと寛容になりなさい」と言い渡しています。

【質問１】みなさんは、自分の信仰的確信に生きようとしたとき、周囲から「もっと寛容になりなさい」と言われたことはありませんか？その時、どのように意見を述べますか？

【質問２】この最高裁の判決には、キリスト者としてどこに問題がると思いますか？

(考えるヒント)

例　自衛官合祀訴訟における「寛容」の考え方に、「日本的寛容」が示されている。

（最大半昭６３年～１９８８年～６月１日）

夫が護国神社に合祀されたことにつき、宗教上の人格権の侵害を訴える原告である妻と合祀した側の宗教法人護国神社を同一線上のおき、前者に対し後者への寛容を説くという人権論としては逆立ちした意味のことを言っている。原告にもっと寛容であるようにと説得している。つまり、みんなが護国神社に守られているのだから、あなたもそんなに目くじらたてないで「寛容」なりなさいと言っている。

＊ 本来信教の自由の保障は宗教的少数者（社会的弱者）の保護のためにあるのであって、此こそが宗教的寛容に他ならない。
＊ 多数派の自由は損なわれることは少ない。信教の自由保障の眼目は、少数者の信仰保障にこそあるのであって、国家と宗教的多数派が結合すれば、なんらの強制を伴わなくてもそれだけで少数者にとっては圧迫となり脅威になるという認識が大切である。この認識の欠けるとき信教の自由は不毛なものとなる。

「国士舘法学」２８号 1996 年９月　宮本栄三

この宮本氏の指摘は、この最高裁の用いた「寛容」という概念の問題点を明確についているように思います。この判決は、宗教的意味、良心の問題をまったく無視して、この原告に「寛容になりなさい」と迫っている構造になります。つまり、個人の自由を認めないだけではなく、その人を「非寛容だ」というレッテルをはっているのです。この裁判はもっともおろかな裁判の一つではないかと思います。大勢の人々の考えに合わせなさい、合わせないのは「非寛容ですよ」と宣告しているのです。国家が個人に対して「みんなとおんなじように考えないのは非寛容だ」と言っているのです。ここに個人の尊厳など生まれる土壌があるとは思えないのです。

このことが「おかしい」と理屈では思っていても、日本人は哀しいくらい「マイノリティ」であることをおそれるところがあります。その「恐れ」はもはや理屈ではなく日本人の心に住み着いている感情かもしれません。そこには「みんなおなじ」であることが私たちの存在の根底にあるように思いますが、つまり私たちのアイデンティティは「みんなおんなじ日本人」ということではなく、キリストの十字架にあることをはっきりとすることが大切であると思います。

No. 3　新しい歴史教科書をつくる会の中心の主張をめぐって

朝日新聞 2001 年４月４日「めざしたのは常識の確立」と題して、西尾幹二氏が寄稿しています。

「歴史を学ぶとは、今の時代の基準からみて、過去の不正や不公平を裁いたり、告発したりすることと同じではない。過去の時代には、それぞれの時代に特有の善悪があり、特有の幸福感があった。私たちの教科書はまえがきで「歴史を裁判の場所にするのはやめよう」と書いた。私たちの教科書は自虐の克服だと言われたが、むしろ「非常識」の克服であったと考えている。」つまり、たとえ日韓併合でも従軍慰安婦でも、その時にはその時なりに必然や必要があった。現代の価値観で過去を裁くな！という主張なのです。

田原総一郎と小林よしのりの対談集で、田原が、日韓併合、植民地政策、南京虐殺などの問題を話した時、小林よしのりは、

「だから、今の観点で善悪の道徳的な価値判断を持ち出しても仕方ない。そうしなきゃならなかったのだろう。その判断がたぶんいちばん正しかったんだろう。当時としては。」

つまり、新しい歴史教科書をつくる会では、

「今の価値観で、昔を裁くようなおろかなことはしてはいけません」ということが言いたいのですね。

【質問１】日本の教会では、戦時中に神社参拝などをしました。その時のことを話し合うとき、「あの時は、そういう時代だったから仕方がなかった」という声をよく耳にします。みなさんは、どう思いますか？

【質問２】 新しい教科書をつくる会では、こんなことも言っています。「自国と自民族をいやしめ、さげすみ、あしざまに言うことが正義であるかのように思い込む倒錯は、実は道徳的堕落と知的退廃の表れにほかならない。（中略）自分の国のことを悪く言うなんて、そんなの教科書じゃあない。自分の国が悪いことをしていてもそれを隠すのが教科書である。」（『新しい日本の歴史が始まる』より）

みなさんは、このような「新しい教科書をつくる会」の方々の主張をどのように思いますか？

（考えるヒント）

さて、この「新しい歴史教科書をつくる会」は、現代の日本の危機的状態を救うのは「常識の確立」と「日本国民に勇気を与えること（自虐史観からの脱却）」そして「公のために生きること」を中心に据えているように思います。そしてこれをどちらかというと批判的な視点に立って発言するキリスト者が多くいます。そのことは理解できますし、この「新しい歴史教科書をつくる会」は、歴史を歪曲するものと思います。また、「公」ということを、日本国つまり国家という枠でしか考えることができずに、国家を超えた倫理や生き方を規定することがその中心的な課題であろうかと思います。

しかし、過去の過ちを見つめ、未来に希望をもつことができるのは、「悔い改めの思想」が定着している必要があります。過去の重荷から本当に解き放つのは福音のみであるのでしょう。いじめや家庭崩壊などの個人のか

なしい体験であったとしても、それを真に解放するのは「過去を認め、かつそこに赦しがあるから」ではないでしょうか。

とするならキリスト教にある歴史観や悔い改めの思想が、この問題のような問題に関して社会に大きく貢献できるはずなのですが、実際のキリスト教の歴史を紐解いていくと、この「新しい歴史教科書をつくる会」と同じ体質を日本のキリスト教界はもっており、この体質を若い世代の私たちが信仰によって克服することが、アジアとの和解であり、責任であると思います。

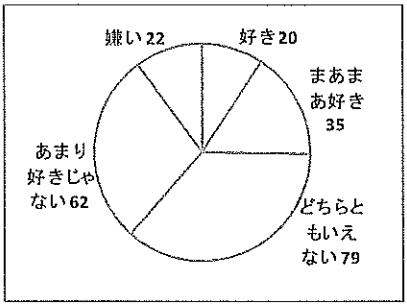
キリスト教界の戦中の過ちに関して、「その時におまえも生きていたら、きっと同じようにしただろう」「当時の価値観では、良心的に考えても限界だった」「現在の価値観で過去を批判してもしかたないだろう」という言葉が返って来ます。私が高度成長期に生まれ（1963年）、あきらかに戦後世代であることがさらに、このように言われることに拍車をかけてしまっていると思います。

【歴史に関する学生の意識調査】
アンケート結果報告

歴史を学ぶ会では、２００７年夏に全国（北海道、東北、北陸、関東、東海、関西、中四国、九州、沖縄の全９地区）で行われたKGK夏期学校・CSCにて、参加者を対象に歴史認識に関するアンケートを実施しました。なお、各問いのグラフはクリスチャンの回答者数で作成されており、また、コメント欄もクリスチャンの方のご意見を載せています。

調査は２００７年８月に行い、クリスチャン２１５名、未信者・求道者３６名、合計２５１名の方にご協力頂きました。本当にありがとうございました。

問１　あなたは「愛国心」という言葉についてどう感じますか？



● **好き**

- 日本文化に誇りを持っているから。
- 日本人として生まれることができて本当によかったと思っている。この国を愛し、この国の習慣・文化が続いていくように願うのは当然だ。
- 自国の郷土や文化を好きになることは大切だと思うから。けれども、これは成長の中で自然とできるもので、国が強制してすべきものではない。
- クリスチャンとして日本を愛し、仕えたいと思う故。

● **まあまあ好き**

- 国を愛すること自体悪い事じゃない。行き過ぎ、国家第一主義的なのは嫌。
- 好きと言い切れないのは戦時中の言葉のイメージがあるから。ただ、自分は日本が大好きだし、誇りを持っているので「愛国心」があると思っている。
- 日本をできれば好きでありたい。
- 神様が遣わして下さった自分の国を愛することはとても素晴しいこ

とだと思うから。
- 「国」という共同体の中で愛し合うことは聖書的にも正しいと考えるから。目指すところは「一致」。

● どちらとも言えない
- ただニュースで聞いたことがあるだけで、まだどういったことなのか良くわからないから。
- 国というより、人を愛すべきだと思う。
- あまり自分の国に対して、考えたりしたことがないから。
- 他国での愛国心は、国の文化などを大切にするというイメージがあるけど、日本では戦中の天皇側を中心とした愛国心を思い起こさせられるため。でも、自分の国を大切にするのはよいことと思う。
- とらえようによると思う。自らの国を愛することは良いことであろう。しかし、自国を愛するあまり、他国と比べたり、他国を批判したりすることは決してあってはならないと思う。
- 政治家が言うところの愛国心というのは賛成できない。
- 日本は好きだが、歴史や、文化を詳しく知ろうとしていなかった。
- 自分の国を愛する気持ちは大切だと思うが、愛国心がなくても問題ない気もするから。
- 私たちの国籍は天にあると聖書は書いてあるので、日本に遣わされている。遣わされている国であるので、その国を愛することは必要だと思うが、忠誠を誓うことはおかしいと思う。
- 今の日本は好きじゃないが、主の前に変えていかねばならない。

● あまり好きじゃない
- アイデンティティーの意味で使われると、自分の考えとズレルので嫌い。でも、国のメンバーを愛するという意味では、まぁスキ。
- 日本の場合、「愛国心」は戦争に利用されたもので、他民族を排除する考えのことだから。
- 日本が好きかと聞かれても、どこが好きかはっきり答える自信がない。
- 自分の母国は好きだが、「愛国心」というと、固く、偏った言い方に聞こえるから。
- クリスチャンである自分は、神様に従って生きていきたいと思っている。国の為に生きたいとは思わないので、国に従いたいとは思わない。
- 国を愛することは、主が私たちに、生きるため与えてくださった国であるので、必要であるし、国をよりよくするため伝道するときに、

愛がなければ、不可能である。でも、一般に言われる愛国心とは意味がちがうように思うから。

- 私たちが愛するのは天国だから。愛国心とか言って、国がどうこう、ってのにこだわるのは好きじゃない。自分がひとつの国を愛したって意味ない。意味なくもないけど、神さまが全部の国を愛してつくったから、それでいいんだ。神さまは全部の国を愛している。だからあたしも神さまの好きな全部の国が好き。
- 愛国心自体が悪いとは思わないが、イエスさまへの愛よりも国への愛の方が強くなると、それは偶像礼拝である。そして、このような状況に陥りやすい傾向が多く見られるから。
- 国を愛することはとても大切なことだと思う。でも、今まで日本が犯してきた罪を悔い改めることが重要だと思う。これができて、本当に自分の国を愛することができると思うから、「愛国心」という言葉については何とも言えない。

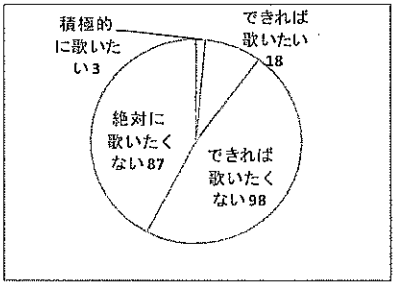
◉ 嫌い

- 人からとやかく言われることではない。
- 愛国心というのは自然にわき上がるものであって、国から強制されるものではないと思う。
- すごく抵抗を感じる。
- それを唱える人の思想がろくなのじゃなかったから、イメージが悪い。
- ドイツで「愛国心」をもっている人たちは危険とされていたから、ナチスとか。
- 国のために全て（命）さえもささげるという印象をもつ。
- 神様から日本に遣わされていることを覚えるとき、日本のことを愛していきたいとは思う。日本人として、この日本の人々のためにとりなしていきたいと思う。ただ、愛国心という言葉には国家の、上からのおしつけのようなものが感じられるから嫌い。

【コメント】

愛国心は大切だけど、いきすぎたのは駄目というのが、多い。ニュアンスの問題を取り扱っている。「愛国心」という言葉のあいまいさがうかがえる。（文責　松尾）

問2　あなたが今、君が代を歌う場面に遭遇したらどうしますか？



● 積極的に歌いたい

- 歌詞は「国歌の繁栄」を願ったものと捉えているから。
- 国家に敬意を示すのは、例えその事実が嫌でも、国際的な人間としての礼儀だから。
- 歌うことが日本人として当たり前。

● できれば歌いたい

- 自分の国の歌くらいきちんと歌いたい。歌の内容は別として。
- 日本人であるから。
- サッカー日本代表の試合では歌う。
- 国歌が歌えない現状が寂しい気もする。
- 君が代について、天皇を賛美しようなどとは思っていません。いろいろな儀式に伴う恒例行事のような印象で、代わりに蛙の歌を歌っても同じことです。
- 日本っぽい歌だから。戦争中に歌われたイメージだが、天皇は日本の象徴であり、世界でも歴史の深い皇室であり、自慢できるものと考えるから。
- 君が代は国歌で、日本の個性だから。
- 日本が神様に祝された上で続くことは願っても悪くないと思うから。
- 歌う歌わないの議論がなされているけど、そんなことに世の中に知られるくらいクリスチャンとしてエネルギーをつかう必要はないと思う。

● できれば歌いたくない

- 自分の国を愛することは天皇ばっかりをたたえることではないと思う。もっと希望のある歌が歌いたい。
- 日本に生きる人として歌うべきかも知れない。でも歌詞の意味を考えると歌いたくない。
- あんま歌いたくない。歌っているふりもしたくないけど、とりあえずそこにいるって感じ。いるだけで、歌ったりはしたくない。
- 曲が暗い。
- これを聞いて悲しむ国の人たちがいるから。

- 内容を理解して歌っている人もいないと思う。
- 国歌そのものはよいが、過去に戦争に使われた歌だし、危険もあると思う。
- なぜ歌う必要があるのか、何を要求されているのかが（教育の現場でも何でも）不明瞭なうえに、一方的であると思うから。
- 「国歌」として認めたくない。皇室の歌がどうして国歌たりうるのか疑問。というか、ふさわしくないと思う。
- 歌詞はともかく日本の曲として代表的だから。ただ外国の人の方では歌われて嫌な思い出を呼び起こしてしまう人もいるかもしれないからどちらとも言えない。
- いつも立って口ぱく。
- 現在の天皇制が神道に基づいているから。もし、皇室から宗教性を消すことができれば問題なくなると思う。
- 国際大会などで国家として歌うのならしょうがないとは思うけれど、それ以外の場では歌いたくない。歌詞に共感しているわけではないから、共感していると見なされるような場合は歌わない。
- 国は好きだけど、国のために犠牲になりたくないから。
- 日本の国に住んでいるものとして歌うべきなんだと思うけど、クリスチャンとして歌うべきではないと思って良くわからない。
- 今までは、普通に歌ってきたが、歌詞の意味などを学ぶ機会があり、それ以来、キリスト者として日本人として歌うのをやめた。
- 天皇制には賛成していない。私の主権者は神様だから。
- 戦争の時に用いられ、アジアの他国において良い感情がしないものを積極的に行うのは、キリスト者として愛のない行動ではないかと感じる。
- 「天皇を神とする」ことに思いをもつ人々に対して、証にならないから、最善をつくして避けるべき。
- 天皇を賛美する歌詞であるため、クリスチャンとしては歌いたくない。だから、歌うフリをするかだまる。
- 君が代の意味する歌詞そのものはあまり好きではないし、私の信仰からくる心情にそぐわない。ただ国家として制定されているのは事実であり、式のプログラムの一部としてなされる場合、歌いはしないが起立する、それが日本国民としての責務である、同郷人への愛だと思う。それは信仰と相反するものではないはずです。
- 私は弱いから弾圧されるときにはころりと迎合してしまうかもしれない。しかし、できるならば、君が代は天皇を称える歌だと理解しているので歌いたくない。

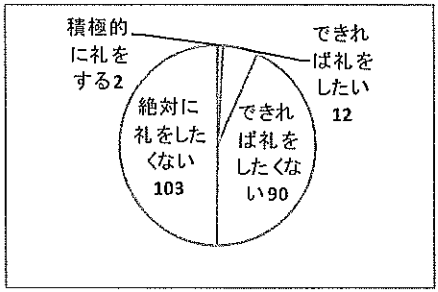
● 絶対に歌いたくない

- 沈黙します。
- というか強制される状況下にいない。そういう下にあるとき、また別の考えがあるだろう。
- 歌ったことがない。歌詞が嫌い。
- 沖縄育ちです。反君が代はその頃からのものです。
- 形だけの思想の自由など国に潜在する矛盾を認めることになるので私は歌わない。
- 戦争利用されたものを無批判に使うことはおかしい。強制は言語道断。
- 天皇をたたえる歌であり、アジア侵略、天皇崇拝強制、植民地支配、信教への自由への弾圧の象徴でもあるから。またそのもとで多くの人が殺されたから。
- 歌詞覚えてないので歌えません。
- 天皇永久性を歌った歌で、戦争反省をしていないと誤解されるから。
- 偶像礼拝になるから。
- 神さまを裏切りたくないから。
- 歌いたくないというより歌わない。歌詞の内容がクリスチャンが歌う歌として適切ではない（どういう場面で歌われるかも問題になるが）。
- 君が代の歌われる思想的背景は、聖書的なキリスト者とは相いれないものであると考えるため。
- 絶対に歌いたくない。けれど、教職を目指しているので、今後、強制されることもあるでしょう。その時は祈りつつ、主により頼むしかないと思う。
- 神様に罪を犯すことはしたくない。聖書の御言葉に従って生きることが全てであるから、人の法より御言葉に従う。
- 天皇を尊敬なんかしていないから。クリスチャンだから。

【コメント】

日本国民として歌うべきであるという人もいれば、いや、ダサいみたいな人もいる。日本国民として・・・・の視点と、なんで強制されるの！！とフィーリング感がある。私たちの生きる基準が感情や正義感ではいけないのではないか。大切なのは、正しい聖書観の基準に立ち続けるということを考えさせられた。命をかける信仰の難しさとチャレンジ。全生活的証を通すならば、この回答から私たちの神は自分のどこにいるのかを確認していかねばならないだろう。（文責　松尾）

問3　あなたが今、日の丸に礼をする場面に遭遇したらどうしますか？



◉ 積極的に礼をする

- 国旗である限りは礼をするべき（もちろん信仰は別）。
- 日本が好きだから。

◉ できれば礼をしたい

- 特に抵抗はない。
- 礼をしていけない理由がよく分からない。
- 上に同じく日の丸を尊ぼうとか、敬おうという気持ちはないので、ただ、礼をするだけです。
- そこに天皇礼拝がふくまれているのなら礼拝をする必要はないと思うが、あえて反抗する必要を感じない。というのも、私たちの世代に、天皇や国家に対する礼拝という意識はないと思うから。

◉ できれば礼をしたくない

- それが国歌崇拝や君が代と同じ意味ならしないべきかもしれないが、国に対する敬意のあらわれとして礼をするのはいいかなぁ。これも偶像崇拝になりますか？
- ただの旗に別に何も意味はないと思うから。
- なんとなく。
- まちがっていることはわかるけど、何でかはよくわかってません。
- 日の丸に礼はしなくていいと思う。
- 君が代に比べて、オレは概念的。とらえ方によるところが大きいので・・・自分でも整理しきれてないところがある。でも「したい」とは思わない。
- 礼をすることは、日本に全てを捧げるようで抵抗感あり。
- 気持ちがないので、正直どうでもいい。敬礼しても、意味のないものになると思う。
- 国旗に礼をするほど愛国心はないから。
- 偶像礼拝にかかわるので

◉ 絶対に礼をしたくない

- 「したくない」という気持ちを持ちつつ、せざるをえないことはあるかもしれない。
- そういうのはきらい。神棚とかに礼はしなくない。

- 国旗に神性はない。
- 戦時中に日の丸を掲げて侵略したのだから。
- 日本が正しいことをしてきたとは考えられない。日の丸を背負って他国に謝りに行きたいぐらいです。
- 戦争に負けて、憲法も変えたのに国旗を変えないのはおかしい。
- マークに礼をするなら、人に礼をするから。
- 君が代とは違って、日の丸自体にどういう意味があって、なぜ問題にされているのかというのは、実は私自身よく分かっていないが、日の丸というものに対して礼をするというのは、偶像礼拝になると思う。
- 賛美ではない。神の栄光のためでない。
- 信仰は行動となって現れるべきであるから。
- 日の丸に限らず礼をするのは（人と会ったときは別）礼拝行為だから。
- 戦争の時に用いられ、アジアの他国において良い感情がしないものを積極的に行うのは、キリスト者として愛のない行動ではないかと感じる。
- なぜ礼をしなければならないのか。礼をしなかったら命の危険にさらされても天国に行けるし、いいのではないか。

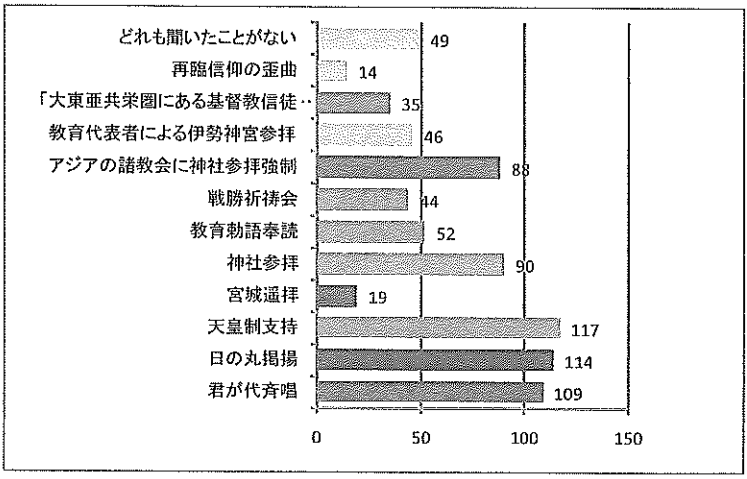
【コメント】

今の信仰は感情なのか？聖書観に生きるというのは、時には自分の感情に対して「否」といわねばならないときがある。

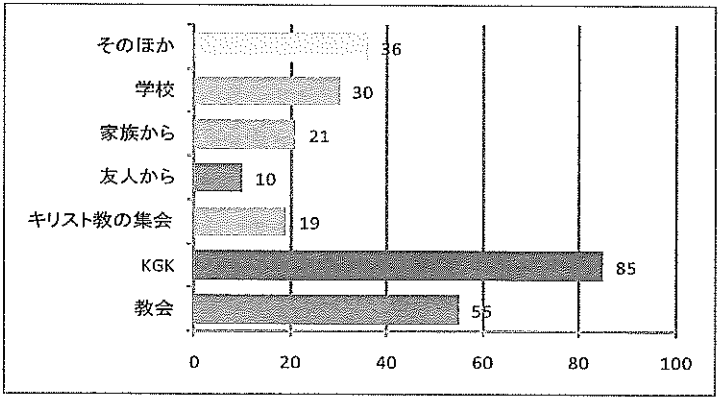
私たちには、３つの基準があるように思う。１つはこの世の価値観。礼儀とか日本国民としての常識ってやつ。（自分を守るためのもの）２つ目は自分なりの正義感。でも、これも命をかけるほどのものではないので、ゆらぐ。またゆらがないとしても自分なりの価値観なので正しいのかは不明。（自分の道徳、得、名誉を守るもの）３つ目は聖書観。これは感情が「否」としても従う姿勢である。（神の誉れを守るもの）

過去を知ることは自分の信仰を知ることにもなる。目を背けずに自分の信仰と向き合っていきたい。（文責　松尾）

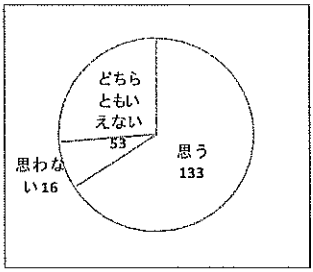
問4 戦時中日本の教会がしていたことで、聞いたことがあるものに○をつけてください。（複数回答可）



問5 問4で知っていた方は、どのようなところで学びましたか？（複数回答可）



問6　問4のような過去が日本とアジアの交わりに壁を作っていると思いますか？



◉ 思う

- NC で韓国の方が「もっと考えるべき」などのことを語ってくださった。
- アジアでは「実際に日本は敵である」という教育が行われている現状がある。
- 韓国の友人から「心の奥底では日本人を嫌っている人が多い」と聞いたことがある。
- 何となく加害者の国の人間という意識からのコンプレックスがある。
- 日本の教会は変わっていない気がする。悔い改めの文を出しても、行動として変わっていない。
- 「日本とアジア」という言い方に違和感がないことが、すでに壁ではないか。

◉ 思わない

- 正確に言えば弱さの一つになっていると思うが、現在の中国や東南アジアとの壁は、現代人が作り上げたと思う。
- （実際に韓国に赴いたが、）教会の過去が交わりに壁を作っているとは思わなかった。戦時中のことが直接の障害ではなく、互いの無理解や無関心が壁を作ると思う。
- 年齢によると思う。若い人はそこまで壁があるように思えない。
- （もし日本の教会が Q4 に挙げられたことをしていたとしても、）それは昔の話だから。
- 原因となっているのは、日本の誠意なき対応だと思っている。

◉ どちらともいえない

- アジア諸国の方々（クリスチャン含め）が、日本が戦争の時にしてきた行為について怒りを持っていることは知っているが、日本の教会がしたことについては直接には言われたことがないので、わからない。
- 日本の教会史について詳しく言及されたことがそもそもなく、それが現代にまで影響を与えているという発想がなかった。
- アジアの教会に神社参拝を強制させることは大きな壁を作っている

と思うが、そのほかは自分の国の問題だと思う。

- 自分が実際にアジアのクリスチャンと、そのような話を詳しくしたことがないので、わからない。
- それら（教会が過去に行ったこと）が直接の原因かどうかは、よくわからない。

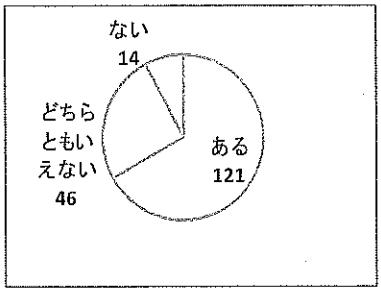
【コメント】

全国のクリスチャンの兄姉の中でも、回答にかなりの差があらわれた結果となっている。「思う」と答えた人の多くは、NC や IFES の交わりに参加して、実際にアジア諸国の人々との交わりを持った中で、彼らと自分たちとの間にある「温度差」を微妙に感じ取っている様子だった。その中で、日本人としての「負い目」を感じたり、アジアの諸教会との完全な一致を感じとることができないところから、このような意見を寄せてくれたようだ。一方「思わない」と答えた兄姉も、アジアの教会や諸国との接触という自らの実体験からこの回答を導き出していると考えられる。また、仮に現在アジア諸国と日本の間に「壁」が存在した場合でも、それは戦時下の日本の教会の行動とは、因果関係がないと考えている。

さらにこの設問で特徴的なのが、「わからない」と答えた兄姉が予想以上に多かったことである。彼らは、アジアの教会や兄弟姉妹との交わりがない、もしくは戦時下の教会の行った事柄を知らない、という理由から「わからない」と回答している。率直な意見として受け取りたい。

これらのアンケートの結果を振り返って興味深いのは、アジアの諸国や教会、兄弟姉妹との接触という同じ理由から壁があると「思う」「思わない」という全く別の回答が導き出されていることである。一方で日本の教会の負い目を強烈に感じる日本人がいる中で、他方では戦時下の教会の行為は過去の事柄として受け止められ、今日には影響はない、もしくは影響があったとしても自分自身とは関連性がない、と考える日本人がいることは、私たち同じ信仰にたつ KGK の学生たちの、不思議な温度差である。さらに、壁を作り出している教会の過去の事柄そのものを知る機会がなく、あまりこの事柄について意識することがなかった兄弟姉妹がいることも考えると、この事柄への意識が学生によっていかに違っているかが明確になる。私たちが同じ信仰にたつ者でありたいと願い続けるなら、過去の事柄に関しても共通を一つにできないものか、と考えさせられる。（文責　百武）

問7 戦争の当事者でない若い私たちに「責任」があると思いますか？



● ある

- 罪には遺伝性・連続性があり、神の怒りは３代、４代と及ぶから。
- 聖書には恵みは１０００代、罪は３、４代にまで及ぶと書いてある。僕らの世代は責任がまだある。
- キリスト教的には罪は継続される。哀歌５：７。
- 日本人キリスト者が犯しやすい罪の性質は今でも変わらず私達にもあるのだということをミッションナイトで知ったから。また、聖書にも子孫が先代の罪の責任を負うということが書いてある。
- うまくいえないが、自分が日本人として生まれた限り、過去の歴史の過ちを自分のものとして悔い改める必要があると思う。
- 当事者でなくても爪痕は残っているし、「個人の問題」では片付けることはできないから。世代が代わったら責任はないというのは、どう考えてもおかしい。
- 当事者でなくても、その歴史によって今の自分たちの生活が成り立っていると思うから。
- 正直「ねぇだろ」と思っている部分もあるが、過ちを繰り返さぬ為、過去を知り、歴史を受け止める必要があると思う。
- 知らないこと自体が、他の国々の人を傷つけているから。
- 知る責任、繰り返さない責任。
- 謝罪の責任と関係を回復する責任はあると思います。
- 直接私たちが原因であるわけではないが、責任が無いといって無視できる問題でもなく、私たちも考えていく必要があると思うから。
- ①日本人として謝る責任②二度と同じ過ちを犯さないと決心する責任③戦争の悲惨さを語り継ぐ責任④知る責任。
- 他人事で何もしないことに責任がある。
- 語り継ぎ、祈り続け、再び戦争を防ぐ責任があるから。
- まだ天皇制は根強く残っているし、そのような日本に生まれたということは罪を負うべきだと思う。
- 実感はあまりないですが、戦争をしていたのは私たちの先輩であり、同じ人間である以上、自分もそのような状況になったらどういった

選択をするのかはっきりと分からないから。
- これからどうなるのかは若者にかかっていると思うから。
- 戦争を行ったことに対しては、若い人達は全く関係がないと思う。しかし、教訓を未来に教える責任は十分にある。
- 戦争を繰り返さないということを約束する責任はある。戦争を起こした責任はない。

どちらともいえない

- 本当は「ある」と書かなければいけないのかもしれないが、戦争を経験していない私たちに「責任」を問われても、口を濁らせてしまう。でも、「ある」と言えるようになりたい。
- あまりに今まで無関心だったのでよくわからない。でも無関心では絶対にダメだと思った。
- 過去の歴史に対して目を開く必要があるから。
- 直接したわけではないという意味では責任はないかもしれないが、遺産相続と同じで、財産を受け継ぐなら直接責任がなければならないから。上の世代がきちんと解決していないなら、直接責任がなくてもやり残したものを引き継がないといけないと思う。
- 今の私達が謝罪しても本当の意味での謝罪にはできない。でも、痛みを思うことが未来へつなぐための私達の責任になるかなと思う。
- 戦争を私達が行ったわけではないから。でも、国の先輩たちが残酷なことを行って申し訳ないと思うのも事実。
- 当事者ではないから。
- 当時生きていた訳ではないから。
- 自分たちは直接関与していないからわからないけど、過去を知る必要はあると思う。
- 戦争していないから関係ないといえば関係ないけど、でもやっぱり悪いイメージがあると思うからそれを取り除くのは今の私たちの責任ではあると思う。
- 直接私達がかかわっていることではないけど、前の世代の問題や罪は次の世代に引き継がれるものだし、今でも解決していないことだから。
- 責任がなくても、理解し、反省すべき点と考えるべき。
- 個人として、戦争そのものに対しての責任はないと思うが、それを学ぶ必要はあり、また日本国民として充分に責任はあると思います。
- 私達が日本人である以上、責任はあるかもしれない。
- 忘れることも責任があるかもしれない、と考える。
- 日本は、同じ敗戦国であるドイツのように、きちんと戦後処理をし

ていないと思う。
- 哀歌５：７は参考になるけど、もっと聖書から示されないと分らない。

● ない
- 生まれてもないのに責任を問われても困る。
- 自分がやったことじゃないから。
- 時代が変わったから。
- 戦争をしている人しか責任はないと思う。
- どちらかと言えば、戦争の当事者よりも上の世代にあると思う。
- 直接に負うことはないが、知識や事実を受け入れることは必要。
- 当事者でないという点において直接において責任はない。しかし、日本人という点において間接的に責任を感じ続けなければならない。
- 一国民として過去を学び、将来への教訓とする必要があるが、太平洋戦争の責任が現代の日本人になるとは思わない。
- 基本的に死ぬのは嫌なので、戦争を引き起こさせない義務はあると思います。しかし、自分にとって大切な人を守るためなら、戦うこともありかなと思います。そう考えると、「責任」について私達は直接的にはないと思いますが、同じことをしえた者として、何か行動することは必要でしょう。
- 謝罪して賠償金も払っているし、国の復興支援にも十分お金を出しているから。でも過去のことについて責められたら、しっかり謝るべき。
- 戦争中に起こったことには責任はないと思うが、キリスト者、教会が犯した・犯し続けている罪や歴史を学び、祈り続けて、悔い改める責任はあると思う。

【評価・課題】

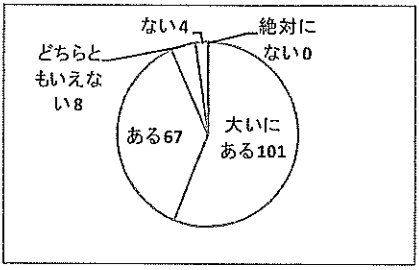
「責任」が「ある」と答えた人は７割にのぼり、「ない」という回答は１割強、「どちらでもない」という回答は２割であった。「責任はあるかもしれないが、なぜ私たちが罪を負うのかわからない」というように、戦争の当事者でない私たちが「責任」を負うと、はっきりとは断言できないという思いをもっている人も多いようだ。

コメント欄を見ていて気になったことは、「責任」を使い分けている傾向にあるということだ。例えば、「知る責任」「語り継ぐ責任」「直接の責任」などである。「直接の責任」については、アンケートの問いに対して「責任」

が「ある」と答えているにも関わらず、「直接の責任」はないとコメントしている学生も何名かいた。

どのような責任が私たちにはあるのか、具体的に考えることは必要である。しかし、「この責任はあるかもしれないけど、この責任はない」というように、私たち自身が過去の負の遺産がもたらす「責任」をいくつかに区分し、自分が示されたと感じる責任のみを選んで負っていこうとすることは、真の悔い改めへとつながるのかどうか疑問に思い、考えさせられた。また、誰に対して、どのような形で「責任」を負っていくのか分からない人が多いということも顕著になり、私たちは聖書から明確に示されることが必要であるとも感じた。　　（文責　佐藤）

問8　クリスチャンが「天皇制」「君が代」「戦争責任」「教会と国家」などのテーマを取り扱う必要はあると思いますか？



大いにある

- クリスチャンの態度がためされる時がくると思う。
- 国に従うか、神様に従うかが問われた時、前者の行動をとらないため。
- 過去に実際に天皇と神と二人の主人に仕えようとしたという過ちがあるため、それを悔い改め、同じ過ちを犯さないように学ぶべきである。
- 上に立つ権威というのは神しかいないという事をきちんと学ぶべき。
- 私たちは神様を見上げており、神様の証として聖書が与えられている。そしてそれをモノサシとして生活している私たちにとって、それ以外の信仰をもつということはあってはならないし、妥協してはならない。人を見上げて、人を神として扱う姿はキリスト者として生きている我々にとってはあってはならない。日本ではその行為が伝統化され、意味が希薄化されつつある。正しい理解が必要である。
- 過去に日本人が何をしてきたか、それが現在でも多くのアジアの人のことを苦しめているということは、本当の和解が主によってもたらされるまで（その後ももちろん）私達に課せられていることだと思う。

- 過去の過ちから学ばない、悔い改めないなら同じことが繰り返されるし、キリスト者としてふさわしくないので。
- クリスチャンも戦争に加担したから、当然だと思う。
- 私達日本人は歴史の中で本当にひどい事をしました。これらのことを自分の問題として考える時、上記の問題は避けられない事柄だと思います。
- 現代の世の中は再び天皇を神とした時代に戻る恐れがあるから。
- 偶像崇拝という罪に関して今日私達は妥協することが多い。十戒に関わることは学んで学びすぎることはない。
- 学ばなければ、どんどん無関心になってしまう。
- 何もわからずとりあえず自分の国が悪いと言って他の国にあやまる人が多い。ちゃんと歴史を調べている人が少ないので取り扱う必要はある。
- それらを学ぶことは、自分の生き方、ありかたに関わると思うから。
- 日本人というアイデンティティーが与えられている限り、切れないテーマだと思います。
- 知らないと、もし同じ状況になりそうな時、止められない。また知ることで心からの悔い改めと謝罪をアジアの国にできるのではないだろうか。
- 教会でもなかなか取り扱わず、見過ごしているから。教会が過去に犯した罪を知って今の教会を見つめないと、教会は悪い方向に行ってしまうと思うから。
- 歴史を学ぶことは現在の教会について学ぶこと。簡単に流されないために。
- 教会が加害者、被害者になった歴史を知って受け継いでいく必要がある。その上で今どういう状況におかれているかを理解し行動していくべき。
- 国家の圧力に負けた日本の教会が多くあったことと、その歴史を二度と繰り返さないために、生きていきたい。
- クリスチャンとしてどう行動すべきかは、学ぶべき。「日本人なら～」で流されてはならないと思う。
- あやふやにして、信仰の確信がゆらぐわけにはいかない。
- 一人ひとりがどんな考え方をもっていたとしても、考え、祈っていかなければいけないと思っている。
- 神に反する国と戦うために。
- 国を内から滅ぼす意味ではなく、「正す」ことはキリスト者の使命だから。活動家になる必要はなくても、知る必要は大いにあるから。
- この世の闇を打ち砕くことができるのは、私たちクリスチャンが祈

っていくしかないと思うから。

- 今憲法改正が叫ばれるなか、以前よりも日本が戦争に対して危機感を持たなければいけないと思う。実際教育の面では、たくさんの圧力が存在するし、世の風潮も移ろいゆくものであてにならない。聖書に立った考え方で、このテーマについて考える必要がある。またEARCの2008のホストとしてもこのことを知っていないといけないと思う。

● ある

- 正直、私を含め、「何となく偶像崇拝だから」とか、「何となく平和主義だから」という曖昧な理由でこれらのテーマを考えている人は多いと思うので、「なぜ良くないことなのか」を明確にする必要はあると思う。
- 私も含めて、何が問題なのかはっきりわからないから。
- 天皇制に政治が動いたりしないように注意して祈る必要がある。
- 私はあまりにも歴史を知らなさすぎると気づかされた。人は歴史を背負って、今（現在）があると思う。やはり、歴史は知るべきだ。
- 知らないクリスチャンが多く、この世のまちがいをみぬけてないから。
- 過去の教会の罪を知るため、忘れないため。
- クリスチャン一人ひとりが考える必要があると思う。しかし、教会をあげての活動には非常に抵抗がある。
- 日本が再び戦前のようにならないために、また主に喜ばれる国になるためには、必要だと思う。
- たしかに、あまり今の若い人たちは上記のようなことを意識はあまりしていないが、世界の人々と関わっていく上で、自国の問題について考えていく必要はあると思う。
- 何も考えずに行っている人に対して、現在の考え方を示し、昔とは変わったことを伝える必要性があると思う。日本は変わらなければならない。
- 「君が代」等はまた強制へ動かないように関わる必要があると思います。
- 戦争に宗教が使われることは大いにあるから。だけど戦争メインになりすぎず神様のことを取り扱ってほしい。
- 必要はあるが、特定の政治的立場や特定の国を養護するようなやりかたは、好ましくない。クリスチャンに必要とされているのは、「真実をしること」「愛を実践すること」だから、聖書に書いていないことを並べて論理を飛躍させるべきではない。

- クリスチャンというか、日本国民が考えるべきだと思う。

● どちらともいえない

- 過剰に取り上げる必要はないと思う。
- まず初めにクリスチャンとしてのアイデンティティーを確立したうえで、どう付き合っていくのかを知るために取り扱う必要があると思うから。
- 教会やキリスト教とどのようなかかわりがあるのかいまいちよくわからないから。でも、それを知るためにこそしるべきことであるなら、学んだ方がよいのかも。
- クリスチャンとそれらが何故関係あるのかよく分からない。でも、学んでみたいという思いはある。
- 必要自体はあると思うが、結局右寄りな意見はクリスチャンが批判することは、最初からわかっているから。
- 考えが偏る可能性があり、客観性に欠けるものになりうるため。
- クリスチャン全体でムキになってもしょうがない。証しにならない。

【コメント】

学ぶ必要が「大いにある」もしくは「ある」という答えが9割以上を占め、「絶対にない」という答えはゼロであった。戦争責任や教会と国家等の問題に対する興味・関心の高さがうかがえる。しかし、問5のアンケート結果から、教会でこれらのテーマについて学んだことのある学生は回答者全体の5分の1しかいないということが明らかになっており、学ぶ機会が少ないという現状があるようだ。

コメントでは、「日本が再び戦時中のような国家へと逆戻りするのではないか」という懸念の声も目立った。教育基本法の改正、教育現場での君が代斉唱の強制など、既に国の支配が強まりつつある。私たちクリスチャンが気付かないうちに（気づいていたとしても）世の流れに合わせて信仰を曲げていってしまうことがこわい。これらのテーマを他人事と捉えることなく、学び続け、考え続けていく必要性を強く感じる。（文責　佐藤）

証し

明星大 2006 年卒業　松尾　献

「誰も、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで、他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」
マタイ６：２４

「ぼくは、立つことも歌うこともできません。」
夢の小学校教員生活の初日の３月２７日、私は校長先生に向かって泣きながらはっきりとそう言いました。そう言った自分に驚きました。
いつもは人と調子を合わせ、自分の意見もなかなか通すことの出来ない臆病者の私が校長を目の前にしてそう告白できたのは、神様の憐れみ以外の何ものでもありませんでした。

●夢の教員

私は昔から学校大好き人間でした。学校に行けば誰かがいる！いつも仲間がいる！いつも居場所がある。いろいろなことを仲間と共に学べる、遊べる・・・そんな学校が大好きでした。
私の通う教会の子どもたちと関わったり、高校生になって進路を考えているうちに、「自分が学校の先生を通して教えてもらった多くの喜びや楽しさを、今度は私が子どもたちに伝えたい」と思うようになり、小学校の教員を目指すようになりました。（中学生は怖いので・・・）
大学も小学校の教員免許の取れる明星大学に入り、かけがえのない友も与えられ、充実した４年間を過ごすことができました。特に、大学３年以降は、実際に授業のない日を利用して小学校にボランティアに行ったり、ある教授のサークルに参加したりと教師という夢が近づくにつれ勉学にも身が入ってきました。私はいつも、子どもたちを前に授業をする日を心待ちにして、コツコツと教材研究をしていました。それは、私の楽しみであり、喜びであり少しも苦とは感じませんでした。
また、「きみたちはラッキーだ。なぜなら、きみたちが卒業する頃には、ごっそり新任の先生を採用するぞ。」なんてことを大学の教授に言われると、「時代もオレを味方している。まさに教師という仕事はボクにとって天職だ。」なんて思っていました。

●日の丸・君が代との出会い

大学生活も順調に進み、４年生の秋、教員採用試験にも補欠合格。夢の教員実現も間近に迫る頃、私はあることで悩み始めていました。それは、「日の丸・君が代」です。

年度末になると時折、新聞やニュースでも少し取り上げられるこの問題・・・ニュースなどをみると、どうやら教員が処分の対象となっているようでした。私も教員になるので知っていないと恥ずかしいからちょっと調べておこう・・・そんな軽い気持ちで、卒業論文として取り上げてみたのですが・・・これは私の人生に大きな転機をもたらしました。

調べていく中で、「日の丸・君が代」にはいろいろと複雑な問題が混ざり合っていることがわかりました。それは法的な問題や歴史問題にとどまらず、私の信仰の問題をも含んでいたのです。

●私とKGK生活

私は、大学生活の中で、KGK（キリスト者学生会）にも深く関わることが許されてきました。先輩と２人で立ち入り禁止の屋上でやった聖研。へんな人がいっぱいいた多摩ブロック。会員じゃないのに、やってしまった夏期学校準備委、会員にちゃんとなってからやったNC・・・

KGKの一つ一つの学びや活動を通して、また同世代のクリスチャンの友人との交わりの中で、私の信仰は変えられていきました。自分の弱さと出会い、主の愛に出会い、４年間のKGK生活の中で「主こそ救い主」であり、主を第一に生活すること、御言葉を実行することこそ「生きる」ことであることを知ったのです。

●「日の丸・君が代」のクリスチャンの観点

卒論を進めていく中で「日の丸・君が代」は天皇への賛美歌であり、これに敬意を示したり、歌うことは偶像礼拝に当たることもわかってきました。教師になった時に信仰の戦いが確実に待ち受けている。ということがわかってくる度に、私はこの戦いから目をそむけたくなり、また自分の都合のいいように逃げようとしている自分がいました。

「日の丸・君が代を気にすることで、もし教師をやめたら誰も公立小学校から先生がいなくなってしまうじゃないか。そしたら、誰が学校をよくすることができるんだ！こんなことで教師をやめていたら、本末転倒ではないのか？」そんなことを考えたりもしました。

ある時には、クリスチャン校長（公立小学校）に電話をし、相談しました。するとその校長先生はローマ書１３章の１節を引用し、こう言いました。

「松尾さん、上に立てられた権威に従うべきです。と聖書に書いてある

でしょ？だから、大丈夫よ。」

私はこれを聞いて安心しました。日の丸・君が代にひれ伏すことは聖書に許されていることなのだと。とにかくその時の私は戦いたくなく、世とも神ともうまくやっていきたかったのです。大好きな教員も出来て、信仰も守れる。自分にとって都合のいいこの言葉で私は安心しました。もうこれで悩まなくていいのだ！

しかし、主は私の信仰を曖昧にされませんでした。クリスチャン校長先生の言葉で私の問題は御言葉によって解決したはずなのに、なぜか心のモヤモヤは取れることはありませんでした。不安になり、別の人に聞くと、それは完全な罪だというのです。偶像礼拝だと言うのです。同じ神を信じ同じ聖書を読んでいるはずのクリスチャンの方に相談しても、返ってくる答えはそれぞれ違いました。（君が代の問題を知ることで最終的には意見は変わりましたが・・・）当時は、牧師をしている父親さえも「大丈夫だ」といったのです。私は、なるべく自分の都合にいい言葉を選んで安心しようとしていたのですが、なぜか「日の丸・君が代」が罪であるということの意見の方が心に残り、私は、よくわからなくなりました。

そして神様が、この「日の丸・君が代」の問題について明確な答えを下さるように祈りました。同時に、もしもこの問題が神様の前に罪深いものならば教師を捨てられる勇気も下さいと祈りました。

●私の進む道

２００５年１０月。多摩地区にある各大学の学生が集う、「多摩ブロック」という集会で「戦争の学び会―君が代―」がもたれました。そこでKGKの山崎龍一主事を招いて学び会が持たれました。山崎主事は、しっかりと聖書から「日の丸・君が代」の問題を扱ってくださり、クリスチャン校長が言われたローマ書もしっかりと講解して下さいました。「聖書では＜上に建てられた権威には従うべき＞と書いてあるけれども、もしもこの建てられた権威が神に喜ばれないことをした時、私たちクリスチャンはＮＯという責任がある」ということを御言葉によって取り次いでくださいました。それは、私にとって痛いメッセージとなりました。やはり、国旗・国家つまり「日の丸・君が代」へ敬意を払うこと歌うことは、偶像礼拝であることがわかったのです。

また、山崎主事の「信仰には命をかける価値がある」という言葉ではっきりと今後の自分のとるべき行動が示された気がしました。今まで私は信仰の価値に気づいていなかったのです。自分の夢を実現させること。自分のやりたいことをやることにすごくこだわっていた気がします。本来比べるほどにもない「信仰」と自分の「夢」を天秤にかけていたのです。痛いメッセージではありましたが、一番大切なことを教えられた気がして、全

ての迷いがなくなったようも思えました。信仰は命をかける価値があるのです。私の道は決まりました。

●教師を辞退

２００６年の３月２４日、市の教育委員会から連絡があり３月２６日に面接を受けることになりました。私はその連絡を受けすぐに、ゼミで紹介していただいた元校長先生に連絡し、面接の練習をしていただきました。面接練習も無事に終わり最後に何か質問はないか、と聞かれたとき、私は、「日の丸・君が代」のこと、またそれに敬意を示すことができないことの旨を伝えました。すると、その校長は激怒しました。また「教師をやめるべきだ」とさえ言われました。そして、なんとかその場で私に「君が代を歌います」と言わせようとしました。私はあんなに、信仰には命をかける価値があると確信し、またキリストを第一としていこうと決意していたのに、とても校長の言葉に心が騒ぎ、負けそうになりました。結果的に、私は自分の考えをゆずることはありませんでしたが、その時、私は初めて世（社会）での信仰の戦いの厳しさを知ったのです。そして、しっかりと日々、信仰の価値を確認すると同時に、祈りなしには、これらの世の圧力に負けてしまうとさえ思いました。

３月２６日の面接では、日の丸・君が代に対しての態度も聞かれることなく面接も終わり、無事に合格して、正式な教員となることができました。夢が適ったのです。

翌日の２７日にはその勤務先の学校から連絡をいただき学校説明を受けることになりました。行ってみると、本当にいい学校でした。学校目標は、「自ら考える子」「考えて行動する子」「思いやりのある子」「体をきたえる子」でありました。

先生に、校舎を案内され、また勤務までに読むべき必要書類も渡されました。また３－２組の担任だとも教えられました。そして、玄関先まで校長先生が見送ってくださった時、私は神様に引き止められた気がしました。そこで、校長室に引き返そうとする校長先生を引き止めました。

「校長先生、入学式では日の丸・君が代やりますよね？」

「やります。」

「ボクは卒論でこのことを扱ってきて、立つことも歌うこともできないと思いました。この時間、交通整理など違う仕事に回していただけませんか？」

「今、それを言っちゃだめだよ。今、それを言ったら私は教育委員会に電話して君の採用を取り消さなくちゃいけなくなる」

「どうしても歌えないんです。この小学校の学校教育目標の中に「考える子ども」とあります。考える子どもを育てるためには、ボク自身が考え

なければ、なりません。ボクは考えてこの結果を出しました。」
なぜかこの時私の目からは涙が溢れていました。
「じゃあ、立てばいい。歌わなくていいから。」
「立つことも歌うこともできません。」
確かこんなやりとりでした。その後、校長先生と私は校長室に戻り、話し合いました。校長先生は本当によい方で、なるべく私をその小学校の教師として迎えようとしてくださいましたが、私の意見が変わらないことを知り、ついに市の教育委員会に連絡をし、校長先生と私は教育委員会にいきました。
まず、「国旗とか何か、国歌とは何か」（日の丸・君が代は法で国旗・国歌として１９９９年に制定されました。）について聞かれました。また、信仰の自由は自由だが、あなたは教師なのでそのルールに従った上で信仰の自由を守りなさいと言われました。つまり、内心で信仰を守りなさいと・・・。それに対して私は、信仰は心だけの問題でもなく、行動も伴うものであると主張しました。そこで、教育委員会は、信仰の自由は結構だが、あなたが違反しているのは、信仰の自由ではなく、地方公務員法の「上司の命令には従わなければならない」という点であると問題点をすり替えられました。
そして、ついには教師を辞退することを提案されたのです。私は東京都のどの小学校もこの様な現状であることを知り、教師を辞退することにしました。

●それから3年後

私は現在、公立小学校で４年生を担任しています。校長先生から特別に許可が下りて「日の丸・君が代」から守られて仕事をさせていただいております。それは、辞退した学校の校長先生の力によるものなのです。実は、３年前のあの日、私が教員を辞退して以来、その校長先生とは定期的に連絡を取り合っています。その校長先生は、いつも私の進路を用意してくださいました。
今、私が置かれている小学校で信仰を守れて働けているのもその校長先生が今の学校の校長先生に働きかけてくださったものなのです。（信仰のこともその時、話してくださいました。）そして私は知っています。この不思議な導きは全て主の計画であったことを・・・
私は全てのことに感謝しています。あの辞退した日のことも、悩んだことも、祈ったことも全てに感謝しています。
神様は時々、私たちに無茶な要求をします。私の場合は「松尾くん、教員をやりたければ、教員をやめなさい」というのが神様の要求でした。（笑）しかし、神様は少しでも神様を信じて歩めば、必ず祝福をくださいます。

人知では到底計り知れない神の計画によって・・・。
私の小さな信仰の証がみなさんの信仰の一歩の助けになれば幸いです。

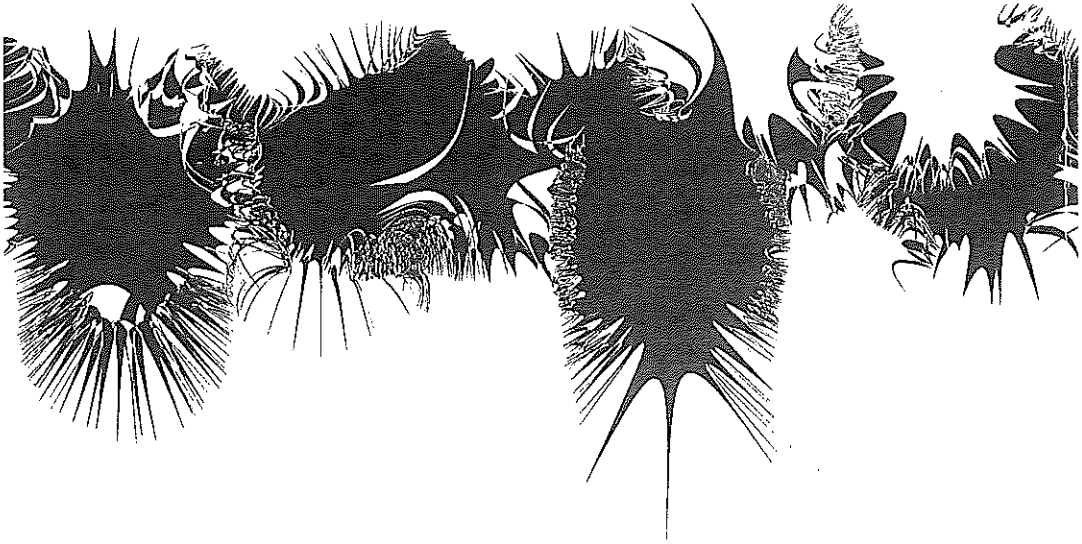
「何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとをキリスト・イエスにあって守るであろう。」
ピリピ人への手紙４：６，７

神の都を目指して生きる

～歴史から学ぶキリスト者の生き方

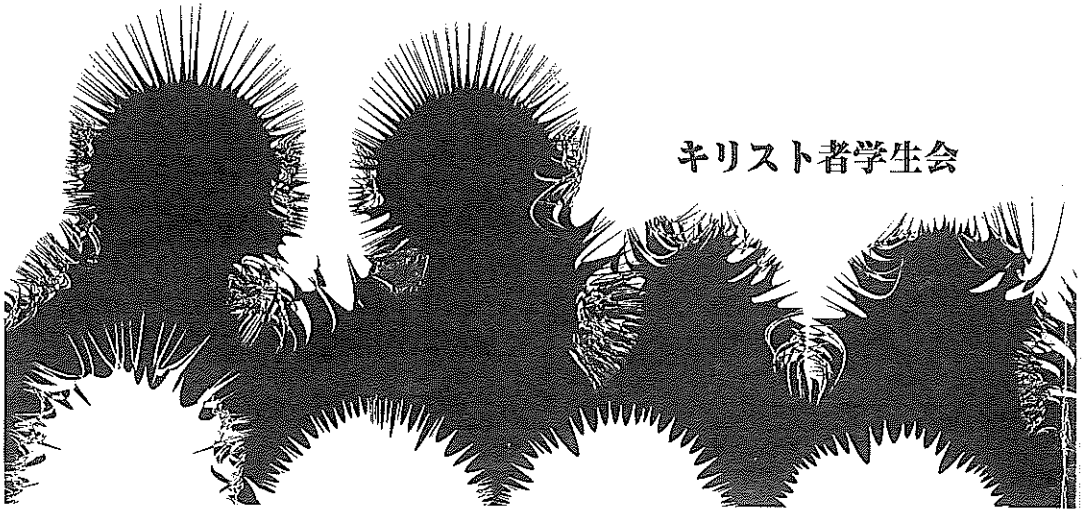
2009年3月　初版第1刷発行

編者　高木創
著者　山崎龍一、佐藤愛実、百武真由美、松尾献
発行者　キリスト者学生会（KGK）
〒101-0062
千代田区神田駿河台2-1　OCCビル3階
tel.03-3294-6916　fax.03-3294-6050
e-mail　office@KGKjapan.net



神の都を目指して生きる

～歴史から学ぶキリスト者の生き方～



キリスト者学生会